

平成19（2007）年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

大坪大縄手遺跡
善田傍示ヶ崎遺跡
青谷上寺地遺跡
短尾遺跡
高江所在遺跡
清水所在遺跡
最勝寺山城跡
上土居遺跡
東今在家所在遺跡
横枕前田遺跡
松原所在遺跡
妙徳寺所在遺跡
布勢所在遺跡
天神山遺跡
鳥取城跡

2008

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成18年度及び平成19年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市は平成16年11月に周辺8町村と合併し、人口約20万人を擁する山陰地方最大の都市になりました。鳥取市内の平野部をはじめ、丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成20年3月

鳥取市教育委員会

教育長 中川俊隆

例　　言

1. 本書は、平成18年度及び平成19年度に国・県の補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は、大坪大绳手遺跡、善山傍示ヶ崎遺跡、青谷上寺地遺跡、短尾遺跡、高江所在遺跡、清水所在遺跡、最勝寺山城跡、上土居遺跡、東今在家所在遺跡、横枕前田遺跡、松原所在遺跡、妙徳寺所在遺跡、布勢所在遺跡、天神山遺跡、鳥取城跡である。
3. 本書における遺構図はすべて南北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
4. 大坪大绳手遺跡のトレンチ番号は、平成16年度に行なった青谷大坪所在遺跡発掘調査からの通し番号である。
5. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
6. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

　　発掘調査主体　　鳥取市教育委員会

　　事　務　局　　鳥取市教育委員会文化財課

　　調　査　担　当　　加川 崇、坂田邦彦（鳥取市教育委員会文化財課）

　　　　　　　前田 均、山田真宏、谷口恭子（鳥取市埋蔵文化財センター）

7. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

赤木三郎　　浅川滋男　　北垣聰一郎　　田中哲雄　　谷本 進　　錦織 勤　　龍 和善
星見清晴　　吉村元男

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経緯	1
1. 発掘調査の契機	1
2. 発掘調査の経過	1
第2章 調査の結果	3
第1節 大坪大繩手遺跡	3
第2節 善田傍示ヶ崎遺跡	15
第3節 青谷上寺地遺跡	17
第4節 短尾遺跡	18
第5節 高江所在遺跡	21
第6節 清水所在遺跡	22
第7節 最勝寺山城跡	25
第8節 上上居遺跡	26
第9節 東今在家所在遺跡	27
第10節 横枕前山遺跡	28
第11節 松原所在遺跡	31
第12節 妙徳寺所在遺跡	32
第13節 布勢所在遺跡	34
第14節 天神山遺跡	36
第15節 鳥取城跡	45

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査遺跡位置図	2
第2図	大坪大縄手遺跡調査トレンチ位置図	4
第3図	大坪大縄手遺跡第23・24・25トレンチ実測図	5
第4図	大坪大縄手遺跡第26・27・28トレンチ実測図	7
第5図	大坪大縄手遺跡第30トレンチ出土遺物実測図	8
第6図	大坪大縄手遺跡第31トレンチ出土遺物実測図	9
第7図	大坪大縄手遺跡第29・30・31トレンチ実測図	11
第8図	大坪大縄手遺跡第32・33・34トレンチ実測図	12
第9図	大坪大縄手遺跡第35・36・37トレンチ実測図	13
第10図	大坪大縄手遺跡第38トレンチ実測図	14
第11図	善田傍示ヶ崎遺跡調査トレンチ位置図	15
第12図	善田傍示ヶ崎遺跡第1・2トレンチ実測図	16
第13図	青谷上寺地遺跡調査トレンチ位置図	17
第14図	青谷上寺地遺跡第1トレンチ実測図	18
第15図	短尾遺跡調査トレンチ位置図	18
第16図	短尾遺跡第1トレンチ実測図	19
第17図	短尾遺跡第1トレンチ出土遺物実測図	19
第18図	短尾遺跡第2トレンチ実測図	20
第19図	短尾遺跡第3トレンチ実測図	21
第20図	高江所在遺跡調査トレンチ位置図	22
第21図	高江所在遺跡第1トレンチ実測図	22
第22図	清水所在遺跡調査トレンチ位置図	23
第23図	清水所在遺跡第1・2トレンチ実測図	24
第24図	最勝寺山城跡調査トレンチ位置図	25
第25図	最勝寺山城跡第1トレンチ実測図	26
第26図	上土居遺跡調査トレンチ位置図	26
第27図	上土居遺跡第1トレンチ実測図	27
第28図	東今在家所在遺跡調査トレンチ位置図	27
第29図	東今在家所在遺跡第1トレンチ実測図	28
第30図	横枕前田遺跡調査トレンチ位置図	29
第31図	横枕前田遺跡第1トレンチ実測図	30
第32図	松原所在遺跡調査トレンチ位置図	31
第33図	松原所在遺跡第1トレンチ実測図	32
第34図	妙徳寺所在遺跡調査トレンチ位置図	32
第35図	妙徳寺所在遺跡第1トレンチ実測図	33
第36図	妙徳寺所在遺跡第1トレンチ出土遺物実測図	34
第37図	布勢所在遺跡調査トレンチ位置図	35
第38図	布勢所在遺跡第1トレンチ実測図	35
第39図	布勢所在遺跡第1トレンチ出土遺物実測図	35
第40図	天神山遺跡調査トレンチ位置図	36
第41図	天神山遺跡トレンチ実測図	37・38

第42図 天神山遺跡第1トレンチ井戸（S E-01）・SK-02尖測図	40
第43図 天神山遺跡出土遺物実測図（1）	42
第44図 大神山遺跡出土遺物尖測図（2）	44
第45図 天神山遺跡出土遺物実測図（3）	45
第46図 鳥取城跡調査トレンチ位置図	46
第47図 18年度鳥取城跡第1トレンチ実測図	47
第48図 18年度鳥取城跡第2・3トレンチ実測図	49・50
第49図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（1）	51
第50図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（2）	51
第51図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（3）	53
第52図 18年度鳥取城跡出土刻印瓦拓影	53
第53図 19年度鳥取城跡第1トレンチ実測図	55
第54図 19年度鳥取城跡第2トレンチ・石垣尖測図	56
第55図 19年度鳥取城跡第3トレンチ・石垣実測図	57
第56図 19年度鳥取城跡第1トレンチ石垣・第4トレンチ尖測図	58
第57図 19年度鳥取城跡出土遺物尖測図（1）	60
第58図 19年度鳥取城跡出土遺物尖測図（2）	60
第59図 19年度鳥取城跡出土刻印瓦拓影	60
第60図 烏府久松山御城積岡	62

図版目次

図版1

- 大坪大綱手遺跡第23トレンチ地盤（北東から）
 大坪大綱手遺跡第23トレンチ掘下げ状況（南から）
 大坪大綱手遺跡第23トレンチ北壁断面（南から）
 大坪大綱手遺跡第24トレンチ掘下げ状況（東から）
 大坪大綱手遺跡第24トレンチ北壁断面（北東から）
 大坪大綱手遺跡第25トレンチ掘下げ状況（北から）
 大坪大綱手遺跡第26トレンチ掘下げ状況（西から）
 大坪大綱手遺跡第26トレンチ南壁断面（北西から）

図版2

- 大坪大綱手遺跡第27トレンチ掘下げ状況（南から）
 大坪大綱手遺跡第28トレンチ掘下げ状況（北から）
 大坪大綱手遺跡第29トレンチ掘下げ状況（南から）
 大坪大綱手遺跡第29トレンチ東壁断面（北西から）
 大坪大綱手遺跡第30トレンチ掘下げ状況（東から）
 大坪大綱手遺跡第30トレンチ西壁断面（東から）
 大坪大綱手遺跡第30トレンチ遺物出土状況（西から）
 大坪大綱手遺跡第31トレンチ掘下げ状況（東から）

図版3

- 大坪大綱手遺跡第32トレンチ掘下げ状況（東から）

- 大坪大綱手遺跡第32トレンチ南壁断面（北東から）
 大坪大綱手遺跡第33トレンチ掘下げ状況（東から）
 大坪大綱手遺跡第33トレンチ西壁断面（東から）
 大坪大綱手遺跡第34トレンチ掘下げ状況（北から）
 大坪大綱手遺跡第34トレンチ東壁断面（西から）
 大坪大綱手遺跡第35トレンチ掘下げ状況（東から）
 大坪大綱手遺跡第36トレンチ掘下げ状況（東から）

図版4

- 大坪大綱手遺跡第37トレンチ削下げ状況（北から）
 大坪大綱手遺跡第37トレンチ北壁断面（南から）
 大坪大綱手遺跡第38トレンチ削下げ状況（北から）
 大坪大綱手遺跡第38トレンチ南壁断面（東から）
 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南西から）
 善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ西壁断面（北西から）
 善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ削下げ状況（南東から）
 善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ西壁断面（北西から）

図版5

- 青谷上寺地遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南西から）
 青谷上寺地遺跡第1トレンチ北東壁断面（南西から）
 犬尾遺跡第1トレンチ掘下げ状況（東から）

短尾遺跡第2トレンチ掘下げ状況（東から）
短尾遺跡第3トレンチ掘下げ状況（南東から）
高江所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南から）
高江所在遺跡第1トレンチ北壁断面（南から）
清水所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北東から）

図版6

清水所在遺跡第2トレンチ掘下げ状況（西から）
最勝寺山城跡第1トレンチ掘下げ状況（北から）
上上居遺跡第1トレンチ掘下げ状況（東から）
東今在家所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北から）
東今在家所在遺跡第1トレンチ南壁断面（北から）
横枕前田遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北西から）
松原所在遺跡第1トレンチ南東壁断面（北西から）

図版7

妙徳寺所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南から）
妙徳寺所在遺跡第1トレンチ東壁断面（西から）
布勢所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南東から）
布勢所在遺跡第1トレンチ南壁断面（北東から）
天神山遺跡調査地遺景（南西から）
天神山遺跡調査地全景（東から）
天神山遺跡第1トレンチ第1面検出状況（西から）
天神山遺跡第1トレンチ北壁断面（南西から）

図版8

天神山遺跡第1トレンチS E-01断面（南から）
天神山遺跡第1トレンチS E-01完掘状況（南から）
天神山遺跡第1トレンチS K-02完掘状況（北から）
天神山遺跡第1トレンチS K-04断面（東から）
天神山遺跡第2トレンチ第1面検出状況（東から）
天神山遺跡第2トレンチ炭集中部1検出状況（北から）
天神山遺跡第2トレンチ第2面検出状況（東から）
天神山遺跡第2トレンチ北壁断面（南西から）

図版9

天神山遺跡第2トレンチ中央東西ベルト断面（北から）
天神山遺跡第2トレンチ北西隅断面（南から）
天神山遺跡第2トレンチP-05断面（南から）
天神山遺跡第2トレンチP-06断面（南から）
天神山遺跡第2トレンチ集石検出状況（東から）
天神山遺跡第2トレンチ中央南北ベルト集石部断面
(東から)
天神山遺跡第3トレンチ第1面検出状況（西から）
天神山遺跡第3トレンチ内サブトレンチ掘下げ状況
(南から)

図版10

天神山遺跡第3トレンチ北壁断面（南東から）
天神山遺跡第3トレンチ東壁断面（南から）
天神山遺跡第3トレンチ西壁断面（北東から）
天神山遺跡第3トレンチ第1面焼土検出状況
(西から)
天神山遺跡第4トレンチ掘下げ状況（南から）
天神山遺跡第4トレンチ北壁・西壁断面（南東から）
天神山遺跡第5トレンチ掘下げ状況（南から）
天神山遺跡第5トレンチ北壁・東壁断面（南西から）

図版11

18年度鳥取城跡第1トレンチ（北東から）
18年度鳥取城跡第1トレンチ石垣1・2（南東から）
18年度鳥取城跡第1トレンチ石垣3（南西から）
18年度鳥取城跡第2トレンチ（南西から）
18年度鳥取城跡第2トレンチ（南東から）

図版12

18年度鳥取城跡第2トレンチC-D断面（北西から）
18年度鳥取城跡第2トレンチ瓦溝（北東から）
18年度鳥取城跡第2トレンチA-B断面（北東から）
18年度鳥取城跡第3トレンチ全景（北東から）
18年度鳥取城跡第3トレンチ石列1（北東から）
18年度鳥取城跡第3トレンチ集石（南東から）
18年度鳥取城跡第3トレンチ（北西から）

図版13

19年度鳥取城跡第1トレンチ全景（南東から）
19年度鳥取城跡第1トレンチ南東断面（北西から）
19年度鳥取城跡平成10年度調査区（南西から）
19年度鳥取城跡第2トレンチ全景（南東から）
19年度鳥取城跡第2トレンチ右垣（北東から）
19年度鳥取城跡第3トレンチ右垣（南から）
19年度鳥取城跡第4トレンチ全景（南西から）

図版14

大坪大縄手遺跡第30トレンチ出土遺物
大坪大縄手遺跡第31トレンチ出土遺物
妙徳寺所在遺跡出土遺物
天神山遺跡出土遺物（1）

図版15

天神山遺跡出土遺物（2）

図版16

18年度鳥取城跡出土遺物
19年度鳥取城跡出土遺物

第1章 発掘調査の経緯

鳥取市は鳥取県東部に位置する山陰の中核都市で、県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担ってきた。平成16（2004）年11月には周辺8町村（国府町、福部村、河原町、羽瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）との市町村合併が成立し、面積765.66km²、人口20万人余りを擁する都市へと拡大することとなった。その結果、それまで市内に2300ヶ所余りとしてきた遺跡の数も倍増の4600ヶ所以上となりさらに増加の一途をたどっている。

このような中、近年は公共事業等の減少もあり各種開発事業は落ち着き傾向にあるが、開発計画との調整が必要となる遺跡も数多くあり、試掘調査の件数も増してきている。

1. 発掘調査の契機

今回報告する発掘調査の契機はそれぞれ以下のとおりである。

大坪大縄手遺跡は、ほ場整備事業計画、善田榜示ヶ崎遺跡と高江所在遺跡は河川改修事業計画、青谷上寺地遺跡、短尾遺跡・上土居遺跡、布勢所在遺跡は、民間の住宅建設及び宅地開発計画、清水所在遺跡は、簡易水道整備事業計画、嚴勝寺山城跡は、デジタルテレビジョン中継放送所建設計画、東今在家所在遺跡、横枕前田遺跡、妙徳寺所在遺跡は、携帯電話基地局基盤新設計画、松原所在遺跡は、県道整備事業計画、鳥取城跡は、鳥取県立鳥取西高等学校建替計画に伴うものである。また、犬神山遺跡は、これまで未調査となっている部分の資料収集を目的に調査を実施した。

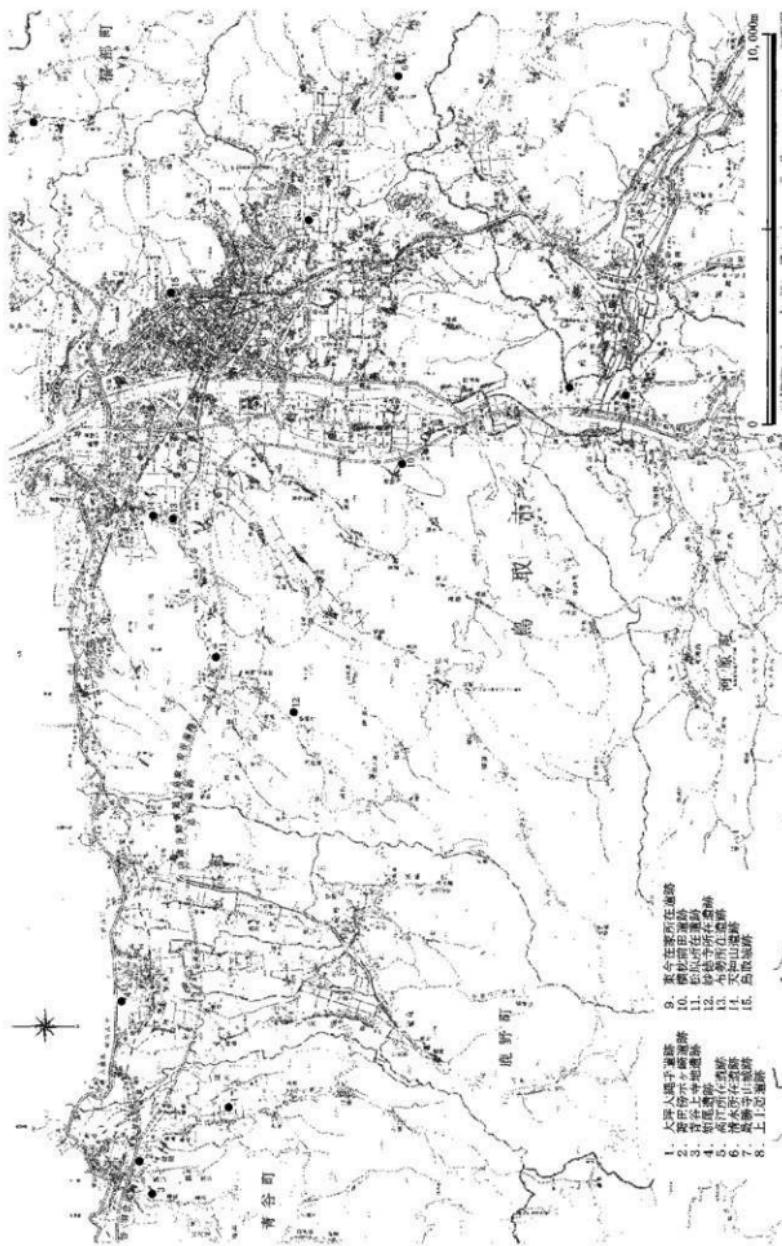
2. 発掘調査の経過

発掘調査は各調査地ともトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼をおいて実施した。調査地は基本的に埋め戻しを行っている。整理作業は、各現地調査が終了した後に行い、本格的な報告書作成は平成20年1月に着手し、2月に終了した。本報告の調査総面積は779.5m²である。なお、本報告書には、平成18年度に調査した大坪大縄手遺跡、鳥取城跡の調査結果についても報告している。

大坪大縄手遺跡の調査は、平成18年度に14箇所、19年度に2箇所の調査を行った。調査期間は平成18年2月13日～3月13日および5月8日～15日である。調査の結果2トレンチから弥生時代の遺物包含層が確認された。19年度に入り嚴勝寺山城跡、東今在家所在遺跡、上土居遺跡の試掘を実施した。調査期間は順に4月17日～18日、4月20日～26日、4月25日である。土器細片が出土したものの、それぞれの遺跡から遺構は検出されなかった。5月に入り、前記の大坪大縄手遺跡、清水所在遺跡、青谷上寺地遺跡の調査を行った。清水所在遺跡は5月23日～24日、青谷上寺地遺跡は5月28日の調査である。両遺跡から遺構は確認されなかった。松原所在遺跡、善田榜示ヶ崎遺跡、妙徳寺所在遺跡は、それぞれ6月5日～6日、6月11日～20日、6月20日～27日の調査である。松原所在遺跡からは近現代とみられる下駄、桶、曲げ物、善田榜示ヶ崎遺跡では陶磁器片、上師器片、妙徳寺所在遺跡からは流入遺物と思われる須恵器、土師器が出土したが、遺構は検出されなかった。横枕前田遺跡は、7月3日～9日に調査を実施した。調査の結果、古墳時代後期から奈良・平安時代初めとみられる遺構が検出され、本年度の10～11月に本調査が行われている。高江所在遺跡は、9月13日～19日、布勢所在遺跡は9月25日～27日、また、短尾遺跡は、10月2日～12日に調査を実施した。高江所在遺跡、短尾遺跡から土器細片が検出されたが、遺構は認められなかった。布勢所在遺跡からは僅かながら中・近世とみられる土器片と遺構が確認された。天神山遺跡は、8月1日～9月14日に調査を実施した。多数の土師皿や井戸等の遺構が検出され多くの資料が得られた。鳥取城跡は、平成18年10月30日～11月29日に中ノ御門、平成19年7月21日～11月7日に太鼓門の調査を行った。調査の結果、鳥取城破去以前の石垣や石垣積直し痕、旧地盤面が確認され、瓦片を中心に陶磁器類が出土した。

なお、本年度調査として、鳥取西道路整備に伴う松原古墳群、ほ場整備事業計画に伴う大坪大縄手遺跡、民間開発に伴う里仁古墳群の試掘調査を実施している。調査報告書は平成20年度の発行予定である。

第1図 調査道路位置図



第2章 調査の結果

第1節 大坪大縄手遺跡

大坪大縄手遺跡は、JR青谷駅から南東約2.7kmの日置川左岸に位置し、大坪集落の東側水田地帯に所在している。大坪集落の西丘陵部および裾部には、大坪古墳群、大口古墳群などの古墳群や、弥生時代後期から古墳時代にかけての土壙墓や貯蔵穴、堅穴住居跡が確認された大口第1遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の墳丘墓、堅穴住居跡が検出された大口第2遺跡、弥生時代後期から奈良時代にかけての住居跡や、古墳が確認されたカヤマ遺跡が確認されている。また、集落北側の水田部には、木版丁、火きり臼、田下駄、梯子等の木製品とともに、人形、馬形、軒車などの木製祭祀具が多数出土した大坪イカウ松遺跡が知られており、多くの遺跡が分布する地域となっている。

今回の調査は、日置谷地区は場整備事業に伴い実施したもので、平成16年度からの継続事業である。調査は、大坪集落と日置川の間に拓けた水田部の東西300m、南北330mの範囲を対象とし、対象地内16ヶ所に第23トレンチ～第38トレンチを設定した。第23トレンチ～第36トレンチは平成18年度に、第37、38トレンチは平成19年度の調査トレンチである。なお、整備事業が進められている地域は、昭和20年代後半には場整備が行われ、その後も暗渠や畦畔の整備などの手が入れられた地区となっている。

第23トレンチ (Tr-23) [第2、3回・図版1]

調査対象地の北西端に設定した1.9×9.7mのトレンチである。地表面の標高は8.0m前後を測り、地表下1.25mまで掘り下げた。表土下約40cmで確認した第5層の橙色砂質土が旧水田耕作に伴う土とみられ、その上層が水田耕作に伴う堆積層である。5層以下は比較的整った層序が観察され、7層の褐灰色粘質土、9層の黒褐色粘質土は安定的な堆積状況を示す。9層の下層には褐灰色粘土層が4～10cm厚で堆積し、その下層が11層の褐灰色粗砂層となる。11層には2～4cm大の円礫が多く含まれ、北側に傾斜する傾向が認められる。土質的にも旧河道にかかる堆積と考えられる。

遺構、遺物は検出されなかった。

第24トレンチ (Tr-24) [第2、3回・図版1]

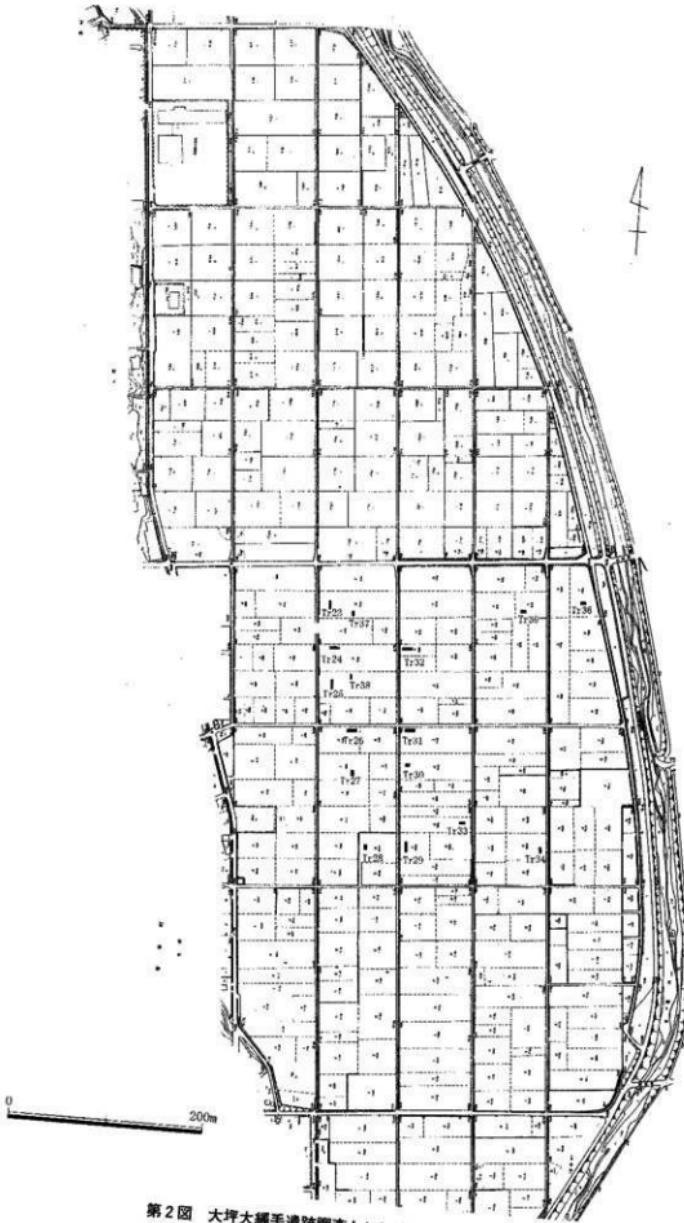
第23トレンチの南40mに設定した1.7×10.6mのトレンチである。地表面の標高は8.5m前後を測り、地表下1.0mまで掘り下げた。地表下50～80cmで確認した第5、6層には、角礫や橙色土ブロックが含まれていることから、6層の上位堆積層は近現代の水田あるいは、以前の場整備時の造成土とみられる。下層には褐灰色砂質土(9層)、黒褐色粘質土(10層)が堆積し、10層の下に旧河道に伴うものと思われる2～4cm大の円礫を多く含む褐灰色粗砂層(8層)が認められる。この第8層からは、磨耗した土師器片8、農工具の柄と思われる木製品1、角材2が出土した。

遺構は、トレンチ西側の第6層から角材を用いた立杭2を検出した。

第25トレンチ (Tr-25) [第2、3回・図版1]

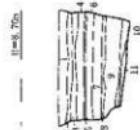
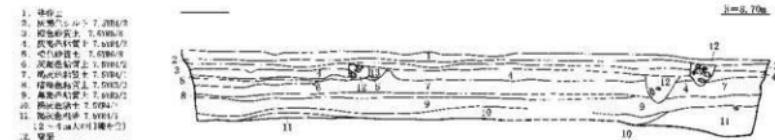
第24トレンチの南35mに設定した2.0×10.4mのトレンチである。地表面の標高は9.0m前後を測る。掘り下げは地表下0.85mまで行い、2～4cm大の円礫を含む褐灰色粗砂層(5層)と、粗砂と2～5cm大の円礫の混合層である第7層を確認した。いずれも河道堆積層の状況を示している。上層の第1、2層が近現代の水田及び旧は場整備に伴う造成土とみられる。

遺構は、暗渠施設と杭列を検出した。暗渠は南東から北西に伸び、10～30cm大の円礫を溝状に並べた丁寧なつくりである。暗渠埋土の第4層からは近現代の陶磁器片11が出土しており、近現代の施設とみられる。杭列は暗渠に平行しており、暗渠施設に関連するものと考えられる。



第2図 大坪大綱手遺跡調査トレンチ位置図

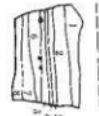
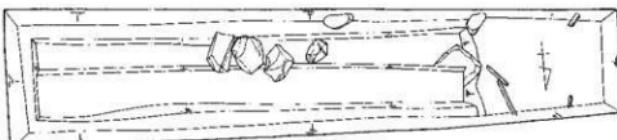
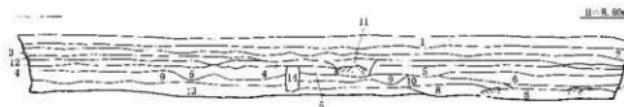
1. 道作上
2. 深褐色砂岩 7. 036/2
3. 褐色砂岩 7. 036/3
4. 淡褐色砂岩 7. 036/7
5. 深褐色砂岩 7. 036/9
6. 淡褐色砂岩 7. 036/2
7. 深褐色砂岩 7. 036/1
8. 淡褐色砂岩 7. 036/2
9. 深褐色砂岩 7. 036/2
10. 淡褐色砂岩 7. 036/1
11. 深褐色砂岩 7. 036/2
12. 深褐色砂岩 7. 036/1
13. 深褐色砂岩 7. 036/2
14. 空洞
15. 深褐色砂岩 7. 036/2



第23トレンチ

1. 道作上
2. 深褐色砂岩 7. 036/4
3. 淡褐色砂岩 7. 036/3
4. 深褐色砂岩 7. 036/2
5. 深褐色砂岩 7. 036/4
6. 深褐色砂岩 7. 036/1
7. 深褐色砂岩 7. 036/1
8. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~3cmの厚さを多く含む)
9. 深褐色砂岩 7. 036/1 (表面にシラフを含む)
10. 深褐色砂岩 7. 036/2
11. 深褐色砂岩 7. 036/1
12. 深褐色砂岩 7. 036/2
13. 深褐色砂岩 7. 036/1
14. 空洞

8. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~3cmの厚さを多く含む)
9. 深褐色砂岩 7. 036/1 (表面にシラフを含む)
10. 深褐色砂岩 7. 036/1 (表面にシラフを含む)
11. 深褐色砂岩 7. 036/2
12. 深褐色砂岩 7. 036/1
13. 深褐色砂岩 7. 036/1
14. 空洞



第24トレンチ

1. 道作上
2. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~4cmの厚さを含む)
3. 深褐色砂岩 7. 036/1
4. 深褐色砂岩 7. 036/2 (薄い) 表面に多量の鉢形空洞)
5. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~4cmの厚さを含む)

6. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~7cmの厚さを含む。表面に点)
7. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~3cmの厚さと他の層合せ)
8. 深褐色砂岩 7. 036/1 (2~4cmの厚さを含む)
9. 深褐色砂岩 7. 036/1
10. 深褐色砂岩 7. 036/1 (厚い)



第25トレンチ

第3図 大坪大綱手遺跡第23・24・25トレンチ実測図

第26トレンチ(Tr-26)〔第2、4図・図版1〕

第25トレンチの南東40mに設定した $2.4 \times 10.6\text{m}$ のトレンチである。地表面の標高は9.3m前後を測り、地表下1.25mまで掘り下げた。地表下40cmあまりで確認した褐色砂質土と $2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫の混合層(4層)や、第15層は造成土とみられ、上層の第1～4、14、15層が近現代の水田及び旧は場整備に伴う造成土とみられる。褐色砂質土と $2 \sim 6\text{cm}$ 大の円礫の混合層である第10層や、円礫を含む褐色砂層第8、11層などが東から西側に傾斜する状況で堆積している。Tr-25と同様に旧河道に伴う堆積層と推察される。

遺構は近現代の暗渠が3条検出された。遺物は、第8、11層から須恵器片1、土師器片4が出土した。いずれも磨耗の著しい細片である。

第27トレンチ(Tr-27)〔第2、4図・図版2〕

第26トレンチの南側40mに設定した $2.3 \times 5.5\text{m}$ のトレンチである。地表面の標高は9.4m前後を測り、地表下0.9mまで掘り下げた。厚さ20cmあまりの耕作土(第1層)以下は整った層序を示す。第2～5層は厚さ8～20cmを測り、安定した堆積状況が見られるが、2層上面で検出した暗渠以外に遺構、遺物は検出されなかった。表土下約80cmで確認した最下層の第6層は、褐色砂質土、粗砂、 $3 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫との混合層で旧河道に係わる堆積とみられる。

第28トレンチ(Tr-28)〔第2、4図・図版3〕

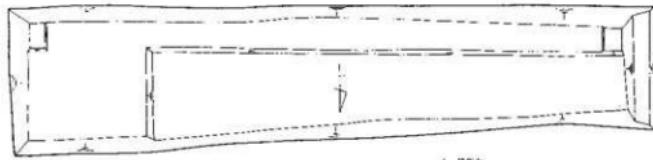
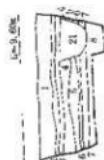
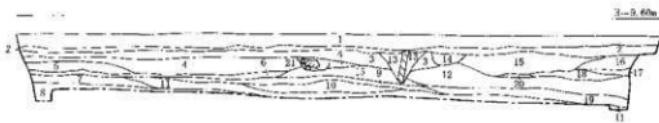
第27トレンチの南東側70mに設定した $2.3 \times 5.4\text{m}$ のトレンチである。地表面の標高は10.7m前後を測るが、西側水田面より1m近く高くなっている、造成に伴い客土されているものと思われる。掘り下げは地表下1.0mまで行った。第2層が現水田の床土とみられ、第2層以下は比較的安定した堆積状況が認められる。最下層の第6層は、灰褐色砂質土、粗砂、 $2 \sim 4\text{cm}$ 大の円礫との混合層である。

遺構、遺物は検出されなかった。

第29トレンチ(Tr-29)〔第2、7図・図版4〕

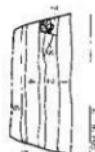
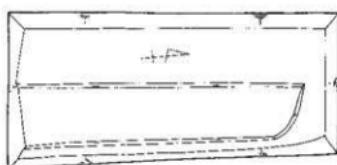
第28トレンチの東側40mに設定した $2.1 \times 10.3\text{m}$ のトレンチである。地表面の標高は10.8m前後を測り、地表下1.3mまで掘り下げた。地表下35cmあまりで確認した第4層は、褐色土ブロックや、 $2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫を多く含むことから、近現代の水田、あるいは旧は場整備の造成土と考えられ、その下層に見られる第5、9層等は旧水田に伴う堆積層とみられる。最下層の第7層は、灰褐色砂質土、粗砂、 $3 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫との混合層で、北側に傾斜する状況が認められ、この傾斜に沿って第10、11、12層が堆積している。

遺構は近現代の暗渠が1条検出された。遺物は、第6層から土師器片2が出土した。いずれも磨耗した細片である。



第26トレンチ

1. 砂利土
2. 黄褐色シルト T. 0.04/2
3. 黄褐色シルト T. 0.04/2
4. 黄褐色シルト T. 0.05/2
5. 上部地盤砂利 T. 0.05/2
6. 可塑性粘土 T. 0.05/2
7. 黄褐色シルト T. 0.05/2
8. 黄褐色シルト T. 0.05/2 (2人入の円筒を生)
9. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
10. 黄褐色粘土 T. 0.05/2 (2人入の円筒の表面)
11. 黄褐色粘土 T. 0.05/2 (内壁面)
12. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
13. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
14. 黄褐色粘土 T. 0.05/2 (2人入の円筒を生)
15. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
16. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
17. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
18. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
19. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
20. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
21. 槽内



第27トレンチ

1. 地面上
2. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
3. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
4. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
5. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
6. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
7. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
8. 黄褐色粘土 T. 0.05/2



1. 槽底
2. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
3. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
4. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
5. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
6. 黄褐色粘土 T. 0.05/2 (3~4枚入の円筒を多く生)
7. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
8. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
9. 黄褐色粘土 T. 0.05/2
10. 黄褐色粘土 T. 0.05/2



第28トレンチ



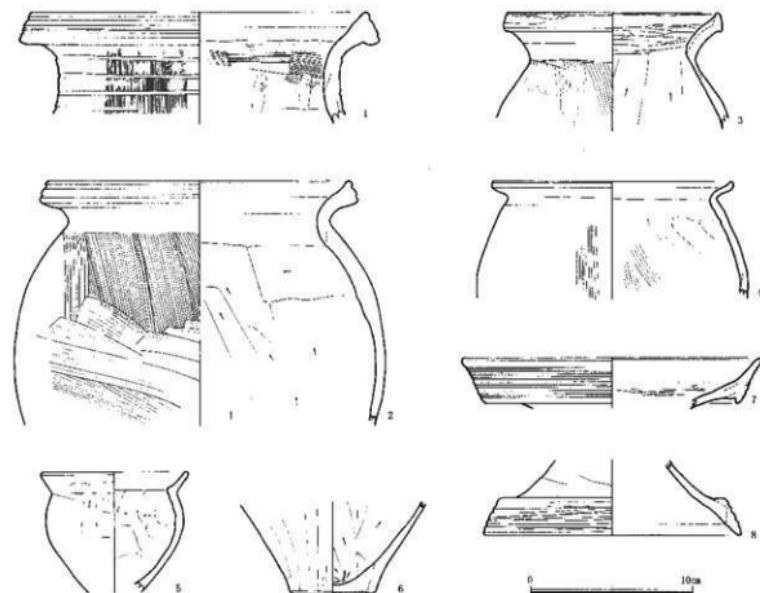
第4図 大坪大绳手遺跡第26・27・28トレンチ実測図

第30トレンチ (T=30) [第2、3、5、7図 図版2、14]

第29トレンチの北側80mに設定した2.4×4.9mのトレンチである。地表面の標高は9.7m前後を測る。掘り下げは地表下1.1mまで行った。第1～3層が近現代の水田、あるいは旧は場整備の造成土とみられる。下層には厚さ10～28cmあまりの、灰褐色シルト（10層）、にぶい褐色砂質土（7層）、灰褐色シルト（4層）、黒褐色シルト（5層）、黒褐色砂質土（6層）、褐灰色砂質土（8層）が堆積している。このうち、地表下90cm前後で確認した第5、6層は弥生土器を含む遺物包含層である。

遺構は、トレンチ西壁直下で立杭2が検出された。杭は自然木を使用した径4cmあまりの丸杭で、第3層からの検出である。

遺物は、第5層から弥生土器、第6層から木製品が出土した。土器はいずれも破片状態で出土し、出土量はコンテナ1ケースを数える。器種は壺（第5図1）、甕（2～5）、器台とみられる（7、8）がある。時期的には弥生時代中期に入る甕（4）もあるが、他はおむね後期の前業に入るものと思われる。木製品は、板材を円形に加工したもので、直径30.5～32.5cm、厚さ1.0cmを測る。

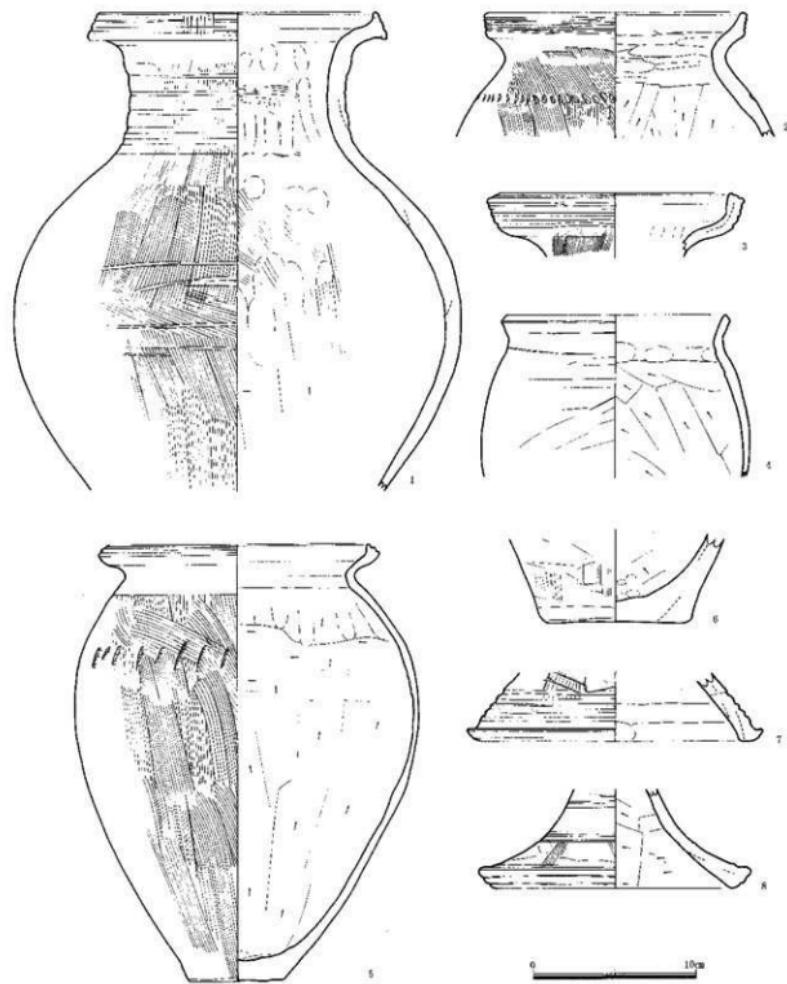


第5図 大坪大縄手遺跡第30トレンチ出土遺物実測図

第31トレンチ (T=31) [第2、6、7図 図版2、14]

第26トレンチの東側50mに設定した2.2×10mのトレンチである。地表面の標高は9.6m前後を測る。掘り下げは地表下1.35mまで行った。第3層上面で暗渠が確認されることから第1、2層が現水田に伴う堆積層である。第3層の下位で確認した第9層は、窪みに堆積した状況を示しているが、明確な遺構として捉えることはできなかった。第3層の下層には、にぶい褐色砂質土（4層）、褐色粘質土（5層）、黒褐色粘質土（6層）、褐灰色粘質土（7層）が堆積している。遺構は検出されなかつたが、地表下80cm前後で確認した第6層は弥生土器を含む遺物包含層である。

遺物は、第6層から弥生土器が破片状態で出土した。出土量はコンテナ2ケースを数え、壺（第6図1）、甕（2、4、5）、口縁部（3）、底部（6）、脚部（7、8）がある。時期的にはおおむね弥生後期前葉に入るるものと思われる。



第6図 大坪大綱手遺跡第31トレンチ出土遺物実測図

第32トレンチ (Tr-32) [第2、8図 図版3]

第24トレンチの東側65mに設定した 2.4×10.1 mのトレンチである。地表面の標高は8.6m前後を測る。掘り下げは地表下1.25mまで行った。第11、15層の上位層が近現代の水田あるいは、以前のは場整備時の造成土とみられる。下層には、灰褐色砂質土（12層）、にぶい黄橙色砂質土（13層）、褐灰色シルト（14層）、褐灰色砂（5層）、褐灰色砂質土（6層）、褐灰色砂質土（7層）、褐灰色粘質土（8層）が堆積している。遺構は検出されなかったが、地表下75cm前後で確認した第7層から土器片が5点出土した。いずれも弥生土器の小片である。

第33トレンチ (Tr-33) [第2、8図 図版3]

第29トレンチの北東側55mに設定した 2.1×6.2 mのトレンチである。地表面の標高は10.5m前後を測る。掘り下げは地表下1.1mまで行った。厚さ10~20cmあまりの耕作土以下は、褐色シルト（2層）、にぶい橙色シルト（3層）、灰褐色粘質土（4層）、褐灰色粘質土（5層）が整然と堆積し、地表下90cm前後の下層は粗砂や2~4cm大の円礫を含む褐灰色砂質土（6層）、灰褐色砂質土（7層）などの砂質土となる。第6、7層の上位層は安定した地盤を形成している様子がうかがわれる。

遺構は検出されなかったが、第4層から土師器片2、須恵器片1が出土した。

第34トレンチ (Tr-34) [第2、8図 図版3]

調査対象地の南東端に位置し、第33トレンチの南東85mに設定した 2.5×5.0 mのトレンチである。地表面の標高は10.5m前後を測り、掘り下げは地表下1.5mまで行った。第5層の上面から暗渠が確認されることから、第5層の上位層が旧水田および現代の水田に伴う堆積層とみられる。第4層以下には、褐灰色粘質土（8層）、灰褐色粘質土（5層）、褐灰色粘質土（6層）が堆積するが、遺構は検出されなかった。

遺物は、第4層から須恵器片2、瓦質土器片1、磁器片1が出土した。

第35トレンチ (Tr-35) [第2、9図 図版3]

第32トレンチの北東120mに設定した 2.5×5.6 mのトレンチである。地表面の標高は8.3m前後を測る。掘り下げは地表下1.05mまで行った。第7層の上面から暗渠が確認されることから第7層の上位層がおおむね旧水田および現代の水田に伴う堆積層とみられる。第7、8層は15~30cmにわたって整然とした堆積が認められる。第8層の下位には2~5cm程度の円礫を含む褐灰色砂礫層が見られ、旧河道に係わる堆積層の様相がうかがわれる。遺構、遺物は検出されなかった。

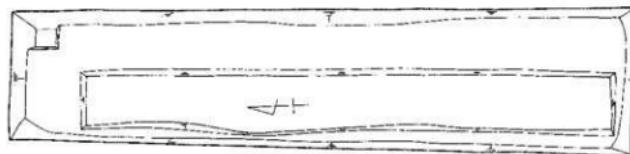
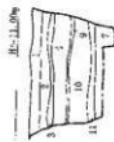
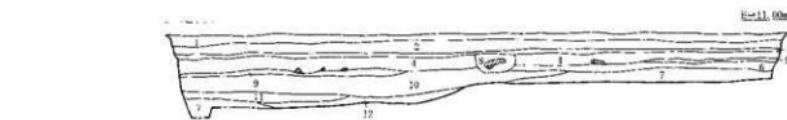
第36トレンチ (Tr-36) [第2、9図 図版3]

調査対象地の北東端に位置し、第35トレンチの東60mに設定した 2.4×5.4 mのトレンチである。地表面の標高は8.9m前後を測り、掘り下げは地表下1.3mまで行った。暗渠の残存状況から、第4層の上位層が現代の水田に伴う堆積層とみられる。第2層以下には、にぶい褐色シルト（4層）、褐灰色シルト（5層）、褐灰色粘質土（6層）が堆積するが、遺構は検出されなかった。第6層下の第7層は灰色の砂礫層で、旧河道に係わる堆積層と思われる。遺物は出土しなかった。

第37トレンチ (Tr-37) [第2、9図 図版4]

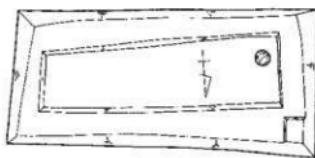
第23トレンチの南東25mに設定した 2.0×5.0 mのトレンチである。地表面の標高は8.1m前後を測り、掘り下げは地表下1.5mまで行った。第8層が現水田に伴う床土とみられる。8層の下層にはにぶい黄褐色シルト（3層）、黒褐色粘質土（4層）が見られ、4層から陶器片が出土している。第10、11層は近現代の土坑状遺構の埋土と思われる。4層以下は黒褐色粘質土（5層）や灰黄褐色粘質土（6層）などの粘質系の土が堆積し、最下層で粘質の強い黒褐色土（7層）が厚さ50cmあまりにわたって確認された。安定した地盤をなしていた様子がうかがわれる。4層の下位層から遺構は確認されなかった。

遺物は、第2、4層から陶磁器片2、5層から板状木製品1、6層から弥生土器片7が出土した。



第29トレンチ

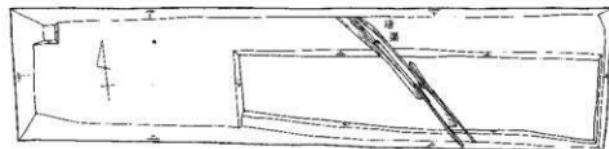
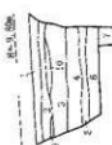
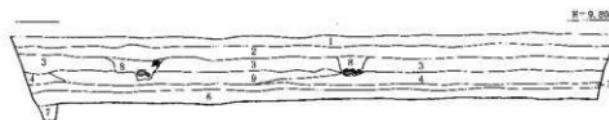
1. 黒色土
2. 黒色シート 7.51m/2
3. 黄褐色シート 7.31m/2 (2~3cmの所隔・褐色土ブロックを含む)
4. 黄褐色シート 7.31m/2
5. 黄褐色シート 7.47m/2
6. 黄褐色土砂質土 7.47m/2
7. 黄褐色土砂質土 7.47m/2 (2~3cmの大塊の黄褐色土砂質土を含む)
8. 黄褐色土
9. 黄褐色土砂質土 7.37m/2
10. 黄褐色土砂質土 7.37m/2
11. 黄褐色土砂質土 7.37m/2
12. 黄褐色土砂質土 7.37m/2



第30トレンチ

1. 黒色土
2. 黑色土砂質土 7.51m/2
3. 黄褐色土・粗砂・砂質・ $\sim 5cm$ の砂質を多く含む
4. 黄褐色シート 7.51m/2
5. 黄褐色シート 7.51m/2
6. 黄褐色土砂質土 7.51m/2 (2~3cmの砂質を含む)
7. 黄褐色土砂質土 7.51m/2
8. 黄褐色土砂質土 7.51m/2
9. 黄褐色土砂質土 7.51m/2
10. 黄褐色土砂質土 7.51m/2

目次
1. 黄褐色シート 7.51m/2
2. 黄褐色シート 7.51m/2
3. 黄褐色シート 7.51m/2
4. 黄褐色土砂質土 7.51m/2 (2~3cmの砂質を含む)
5. 黄褐色土砂質土 7.51m/2
6. 黄褐色土砂質土 7.51m/2
7. 黄褐色土砂質土 7.51m/2



第31トレンチ

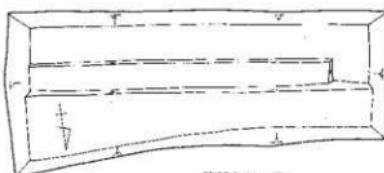


第7図 大坪大綱手遺跡第29・30・31トレンチ実測図



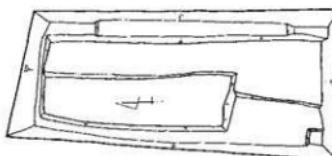
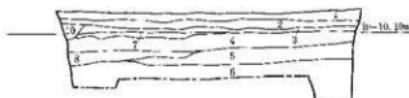
第32トレンチ

1. 跡壁上
2. 電線シント 7.5mH/3
3. 砂質土層 2.5mH/3
4. 残瓦層 1.3mH/3 (3m × 6m大の凹面を有す)
5. 砂質土層 7.5mH/1
6. 砂質土層 7.5mH/1
7. 砂質土層 7.5mH/1
8. 砂質土層 7.5mH/1 (砂質土層が2段に分る)
9. 砂質土層 7.5mH/1
10. 砂質土層 7.5mH/1
11. 砂質土層 7.5mH/1 (2~4cmの大粒砂を含む)
12. 砂質土層 7.5mH/1
13. こじり型瓦の破片 100kg/4
14. 破壊瓦 7.5mH/1 (2~4cmの大粒砂を含む)
15. 破壊瓦 7.5mH/1 (2~4cmの大粒砂を含む)



第33トレンチ

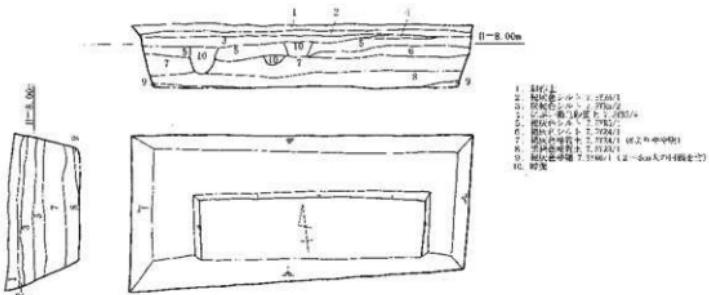
1. 跡壁上
2. 電線シント 7.5mH/3
3. 砂質土層 2.5mH/3
4. 残瓦層 7.5mH/1
5. 砂質土層 7.5mH/1 (2~4cmの大粒砂を含む)
6. 砂質土層 7.5mH/1
7. 砂質土層 7.5mH/1 (2~4cmの大粒砂を含む)
8. 砂質土層 7.5mH/1



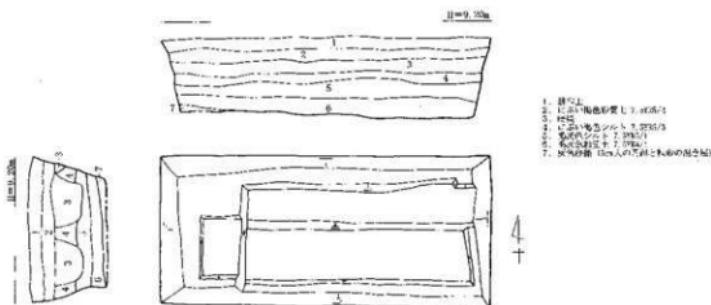
第34トレンチ

1. 跡壁上
2. 電線シント 7.5mH/2
3. 砂質土層 7.5mH/3
4. 残瓦層 7.5mH/1
5. 砂質土層 7.5mH/1
6. 砂質土層 7.5mH/1
7. 砂質土層 7.5mH/1
8. 砂質土層 7.5mH/1
9. 砂質土層 7.5mH/1
10. 砂質土層 7.5mH/1

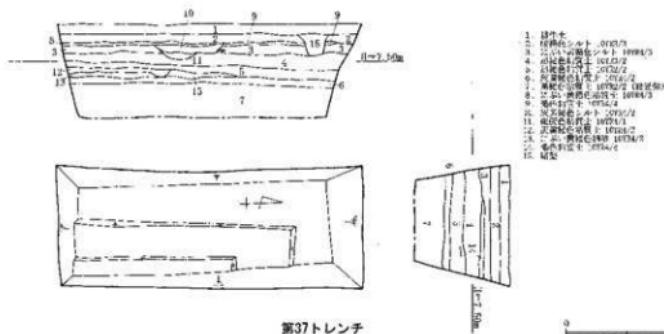
第8図 大坪大綱手遺跡第32・33・34トレンチ実測図



第35トレンチ



第36トレンチ



第9図 大坪大綱手遺跡第35・36・37トレンチ実測図

第38トレンチ (Tr-38) (第2、10図) (図版4)

第25トレンチの北東20mに設定した2.0×5.1mのトレンチである。地表面の標高は8.8m前後を測り、地表下1.4mまで掘り下げを行った。第3層が現水田に伴う床土とみられる。3層下位の層序は灰黄褐色粘質土(4、5層)、暗褐色粘質土(6層)が認められ、4層からは陶磁器、須恵器、土師器が出土した。6層の下層には黒褐色土の第12、13、14層がみられ、凹部に堆積した状況を示しているが、明確な遺構として捉えることはできなかった。地表下1.3mあまりで検出した第10層は褐灰色砂礫層で、旧河道に係わる堆積の可能性が考えられる。

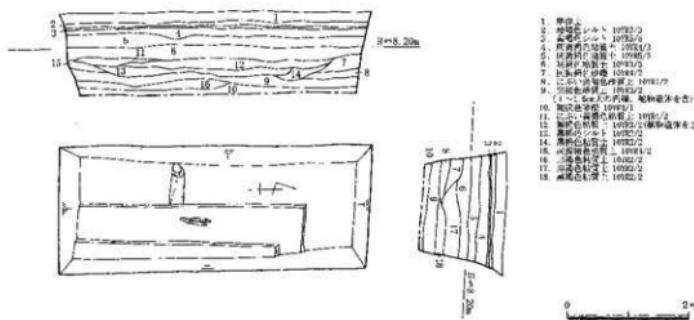
遺構は検出されなかった。遺物は、第4層から陶磁器片2、須恵器片3、土師器片10が出土した。いずれも磨耗した小片である。また、第12層から自然木1、最下層の10層から土師器1と焼痕が認められる自然木が1点検出された。

小 緒

大坪集落の東側に拓けた平野部の試掘調査は、日置谷地区のは場整備に伴い平成16年度から開始され、17～19年度に継続して行われている。その間、17年度には大坪イカウ松遺跡の存在が確認され、翌18年度に本調査が行われた。

今回の調査対象地は大坪イカウ松遺跡の南東側水田部である。試掘トレンチの設定は、自然堤防状の高まりが推定される箇所と、旧河道が予想される東西両側に行なった。調査の結果、西側に設定した第23～27トレンチと東側の第35、36トレンチから砂礫層が確認され、旧河道に係わるものとみられる堆積状況が確認された。これに対して、南東端に設定した第34トレンチや、中央部の31～32、37トレンチでは明確な砂礫層は認められず、東西トレンチと比べ層序の様相が異なる状況が明らかになった。南東部から平野部中央部にかけて河川に挟まれた微高地状地形が存在するものと推定される。現況の標高差でも北西端に設定した第23トレンチと南東端の第34トレンチの差は2.5m前後を測り、北西から南東に高さを増す状況が明らかに認められる。今回の調査では、明確な遺構は検出されなかったが、第30、31トレンチからは弥生土器の包含層が確認されており、河川に挟まれた微高地状地形上に遺跡が存在することが予想される。

確認された遺物包含層はかなり深い位置に存在するが、は場整備計画の状況を精査しながら開発側との協議の中で遺跡の保存を図りたい。



第10図 大坪大撃手遺跡第38トレンチ実測図

第2節 善田傍示ヶ崎遺跡

善田傍示ヶ崎遺跡は、JR青谷駅から南東約1kmの下善田集落の北側に位置し、日置川と露谷川に囲まれた水田地帯に立地している。周辺丘陵には善田古墳群、露谷古墳群、奥崎古墳群などが展開し、北西側には青谷上寺地遺跡が位置している。善田傍示ヶ崎遺跡における調査は、平成15年度と16年度に計5箇所の試掘トレンチを設定して行われており、第1、5トレンチから検出した本器窓から馬形、簾車などの木製祭祀具が出土している。

今回の調査は、日置川・露谷川改修工事に伴い実施したものである。調査対象地は日置川左岸および露谷川両岸の事業地内で、日置川と合流する露谷川左岸に第1トレンチ、日置川左岸に第2トレンチを設定した。平成16年度調査の第5トレンチからは北東へ約200m、第1トレンチからは東に100~150m地点にあたり、遺跡の北東端に位置する。

第1トレンチ (Tr-1) [第11、12図 図版4]

露谷川の河口左岸に設定した3.8×6.1mのトレンチである。地表面の標高は0.9m前後を測る。地表下2.0mの標高-1.1mまで掘り下げを行った。第5層の上位層が現水田の耕作土および旧ほ場整備時の造成土と思われる。5層以下には、厚さ6cmあまりの細砂混じりの灰黄褐色砂質土（6層）、褐灰色粘質土（7層）、黒褐色粘質土（8層）が堆積する。標高-0.1m以下には、植物遺体を含む黒褐色粘質土の第9、10層や暗オーリーブ褐色粘質土の第17層が厚さ90cm以上にわたって見られ、低湿地の堆積状況を示している。第7、8層あたりが比較的安定した地盤を成しているが遺構は検出されなかった。遺物は、第10層から板状の木製品が1点出土した。長さ8.6cm、幅1.1cm、厚さ0.8cmを測る破片である。

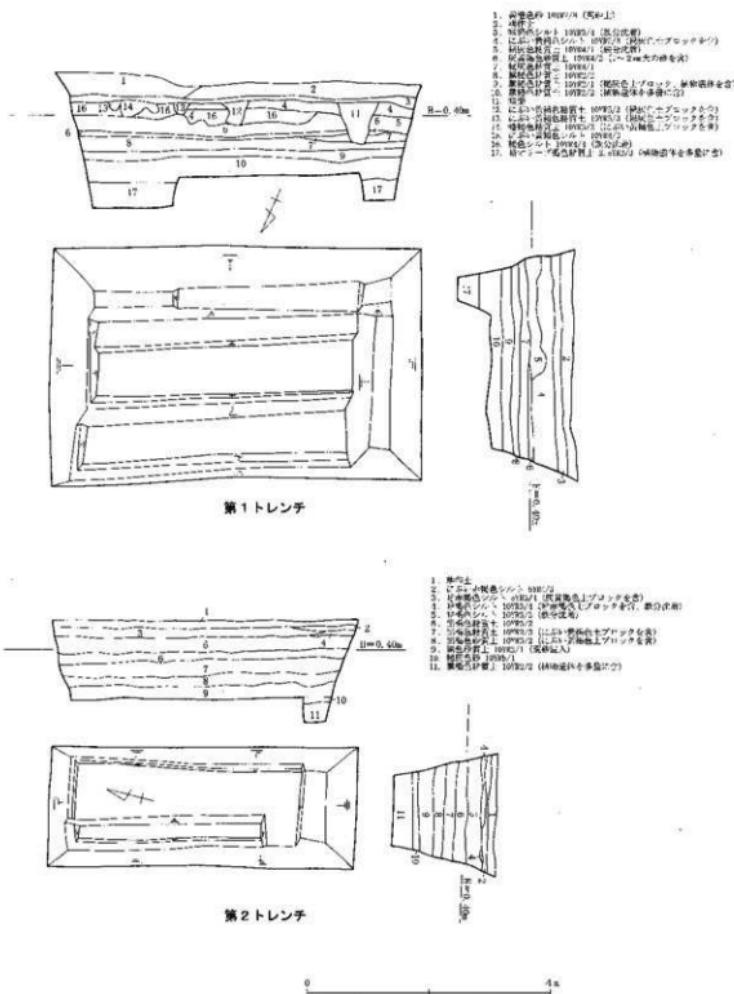
第2トレンチ (Tr-2) [第11、12図 図版4]

第1トレンチの南東80mの日置川左岸に設定した2.0×5.1mのトレンチである。地表面の標高は0.9m前後を測る。地表下1.75mの標高-0.8mまで掘り下げを行った。第4層が現水田の床土とみられ、その下層に暗褐色シルト（5層）、黒褐色粘質土（6、7層）、黒褐色砂質土（8層）、黒色砂質土（9層）が自然と堆積している。

第9層の下層には褐灰色の砂層が帶状にみられ、その下位に植物遺体を多量に含む黒褐色粘質土の第11層が認められる。11層からは低湿地における堆積の状況がうかがわれる。遺構は検出されなかった。遺物は、第8層から陶磁器片4、第9層から陶磁器片4、土師器片1が出土した。



第11図 善田傍示ヶ崎遺跡調査トレンチ位置図



第12図 善田傍示ヶ崎遺跡第1・2トレンチ実測図

小 結

善山傍示ヶ崎遺跡は平成15、16年度に試掘調査が行われ、盾形、馬形、人形など奈良期の木製祭祀具が大量に出土している。これらの遺物は、その出土状況などから流入し漂着したものと考えられており、露谷川流域が祭祀の場として想定されている。

今回の調査は、河川改修に伴って実施したもので、対象地が埋められる事から広範囲のトレンチ設定が困難な状況であり、堀下げは標高-1m前後までにとどまった。調査の結果、遺構は検出されず、出土遺物も陶磁器片や土師器片がわずかであった。下層で確認された植物遺体を多く含む堆積層などから露谷川下流域沿辺に低湿地帯が広がっている様子がうかがわれ、遺跡の主体は南西側に張り出した丘陵の緩辺部になるものと考えられる。

第3節 青谷上寺地遺跡

青谷上寺地遺跡は、JR青谷駅の南側に位置し、町の西側を流れる勝部川と東側を流れる日置川の合流地点付近に立地している。青谷上寺地遺跡の調査は、旧青谷町と鳥取県による調査がつづけられ、縄文時代から古墳時代にかけての遺構が確認されている。調査の結果、遺跡の中心となる弥生時代後期の大規模な護岸施設や祭祀場跡、水田跡の遺構とともに、多量の土器類のほか、農耕具、漁撈具、建築材、卜骨、金属製品などが数多く出土した。特に、弥生時代後期の溝内からは約5,300点にのぼる多量の人骨が出土し、殺傷痕のある人骨や、「脳髄」が遺存した頭蓋骨3点が出土し全国的にも注目を集めた。

遺跡の周辺には、露谷古墳群や、100基以上の古墳で構成される古川古墳群、勝浦川を挟んだ沖積平野西側には岩木遺跡が所在している。

今回の試掘調査は個人住宅の建設に伴うものである。調査対象地は谷山集落の北西側に近接する水田部で、遺跡のはば南端にある。

第1トレンチ (Tr-1) [第13、14図 図版5]

谷山集落から30mあまり北西の水田部に設定した1.9×3.9mのトレンチである。地表面の標高は3.8m前後を測り、地表下2.45mまで掘り下げた。第3層が現水田の床土とみられ、その下層は暗褐色シルト(4層)、黒褐色および黒色の粘質土(5~9層)が堆積している。最下層の9層は、にぶい赤褐色土を斑点状に含む強粘質土で、厚さ80cm以上にわたってみられることが基盤層になるものと思われる。

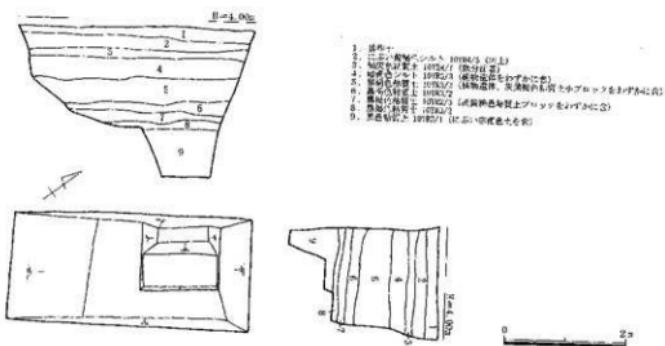
遺構は検出されなかった。遺物は第4、5層から板状木片が出土している。

小 結

今回の調査対象地は遺跡の南側に位置している。青谷上寺地遺跡の調査は1998年から行われているが、遺跡南側の範囲はまだ不確定な状況にある。調査の結果では遺構は確認されず、土器類も出土しなかつたが、周辺開発事業については十分な注意が必要である。



第13図 青谷上寺地遺跡調査トレンチ位置図

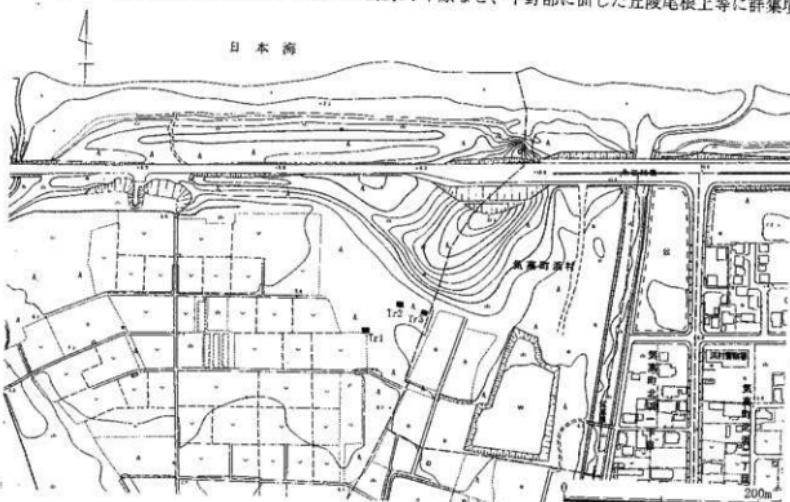


第14図 青谷上寺地遺跡第1トレンチ実測図

第4節 短尾遺跡

短尾遺跡は、鳥取市気高町八束水字短尾、国道9号線浜村中央バス停から約550m西の浜村砂丘上に突き出た標高28m弱の独立丘陵の西から南据の砂丘地に所在する。北側の日本海浜村海岸線からは約150m南に位置する。

本遺跡からは大正11年（1922）の分布調査で縄文時代中期の土器片・石斧・石鎌等が採取されたほか、遺跡所在地の八束水地区砂丘地内出土とされる有舌尖頭器等も知られている。また弥生時代のものとして弥生土器や石鎌、石斧、石錺、石庖丁、貝製品が採取されている。古墳時代には周辺の丘陵尾根上や裾部に多くの古墳が造営され、特に後期には八束水や下原など、平野部に面した丘陵尾根上等に群集墳



第15図 短尾遺跡調査トレンチ位置図

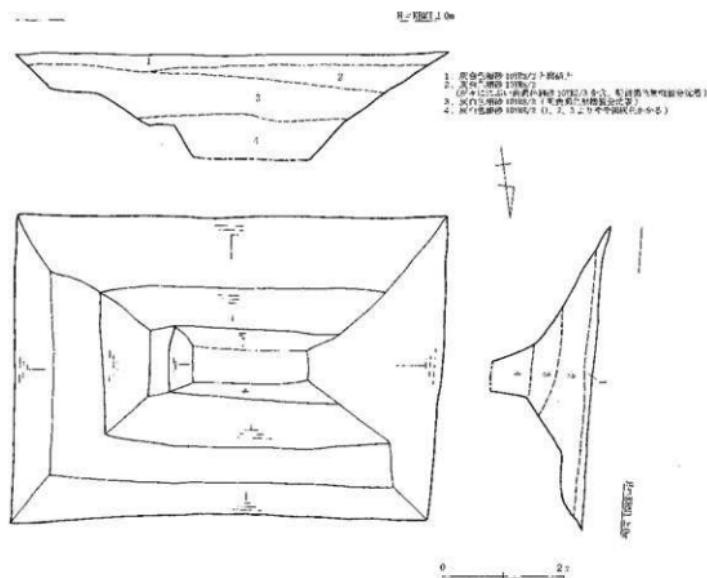
が形成されている。歴史時代以降には上原遺跡が奈良時代から平安時代に至る因幡国氣多郡衙に比定されており、周辺の上原南遺跡、上原西遺跡、山宮阿弥陀森遺跡等とも関連性が指摘されている。

今回の調査は、民間の宅地開発事業計画に伴って実施したものである。予定地は上述のとおり古くから遺物が採取されたことで知られる砂丘地であったが、これまで表面観察の分布調査が行われたのみで遺跡の性格や遺構の遺存状況等については詳細不明であった。このため、オープン掘りではあるものの遺構・遺物の確認に主眼を置いて、独立丘陵南西側対象地内の南西端付近と丘陵裾の砂丘地に計3ヶ所のトレンチを設定した。掘削は、各トレンチとも砂丘地であることから砂の崩落に留意して緩傾斜掘りと段掘りを併用して実施した。

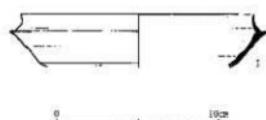
第1トレンチ(Tr-1)【第15、16、17図・図版5】

丘陵南西側裾の山林部分と現在は荒地化している以前の畑作地との境付近に設定した5.0×7.0mのトレンチである。現地表面は標高5m程度で、地表面下1.7m付近までは新砂丘と見られる灰白色細砂の堆積が続くが、それ以下は湧水と壁面崩壊で掘削確認が困難であった。

遺構は検出されず、遺物は地表面下約60cmから二次堆積と見られる表面の摩滅した須恵器杯身片1点(第17図1)が検出された。



第16図 短尾遺跡第1トレンチ実測図



第17図 短尾遺跡第1トレンチ出土遺物実測図

第2トレンチ (Tr-2) (第15、18図・図版5)

丘陵南西側裾近くの山林部分で、第1トレンチの北東約40mに設定した5.0×7.0mのトレンチである。現地表面標高5m強で、地表面直下からナイロン袋の一部、現代陶器片とともに投棄されたと見られる複数の獸の頭骨等が検出されたが、以下地表面下2m付近までは第1トレンチと同様の新砂丘と見られる灰白色細砂の堆積が続く。それ以下は湧水と壁面崩壊で掘削確認が困難であった。

遺構は検出されず、遺物も上述の獸骨等以外には認められなかった。

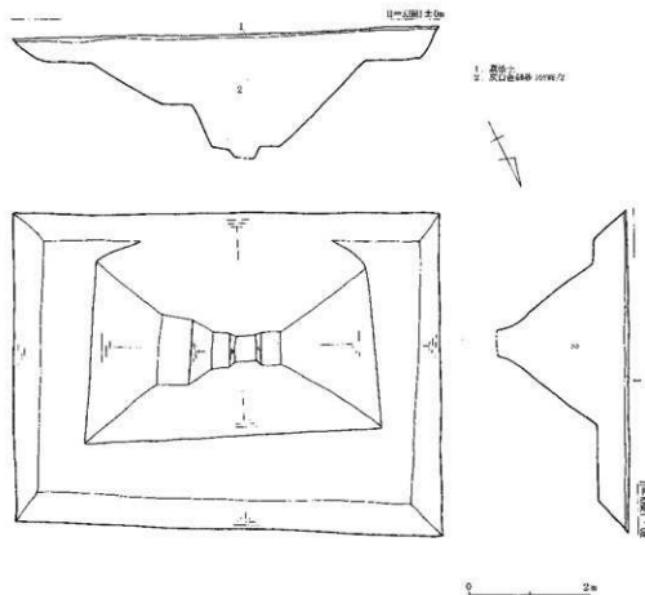
第3トレンチ (Tr-3) (第15、19図・図版5)

丘陵南西側裾の山林部分で、現在は放棄されたぶどう等の果樹栽培ハウス跡との境付近、第2トレンチの東約20mに設定した5.0×6.0mのトレンチである。現地表面標高5m強で、地表面下2m程度まで掘削した。地表面下0.3~0.8m付近(第3層)はやや色合いの異なる薄い灰黄色細砂と暗灰黄色細砂の互層が認められるが、砂丘地で認められるいわゆるクロスナ層ではなく、その上下には同様のにぶい黄橙色細砂の堆積が続く。地表面下2m以下は湧水と壁面崩壊で掘削確認が困難であった。

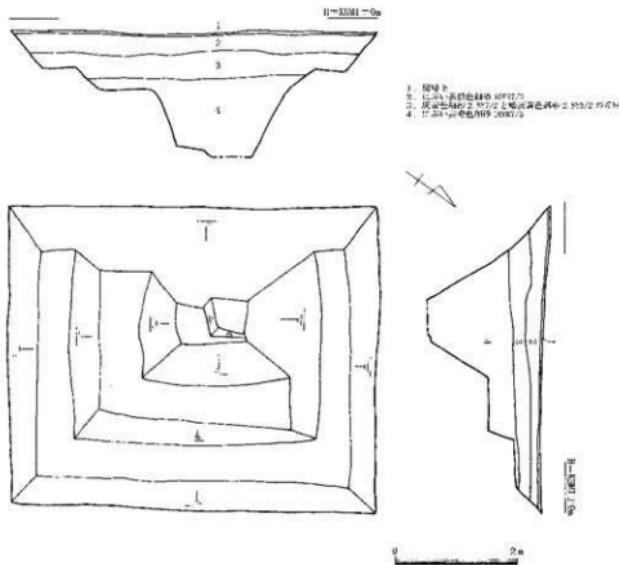
遺構は検出されず、遺物は地表面下約1mから二次堆積と見られる表面の摩滅した須恵器体部片1点が検出された。

小 結

以上の結果、調査範囲内では明瞭に遺構を示すものは認められず、遺物も二次堆積と見られる須恵器片2点に止まった。ただ砂丘地では数m下に遺跡が存在することもあり、開発等では工法も含めて注意が必要である。



第18図 短尾遺跡第2トレンチ実測図



第19図 短尾遺跡第3トレンチ実測図

第5節 高江所在遺跡

調査対象地は、JR福部駅から南西約800mの箭渓川左岸に位置し、高江集落南東の平野部に立地している。調査地から僅か100m南の丘陵部に箭渓4、5号墳が所在し、この他にも箭渓川左岸丘陵中には高江古墳群、八重原古墳群が分布する。右岸の水田部では鳥取県の綱文遺跡を代表する栗谷遺跡、その背後丘陵には栗谷古墳群が所在している。

今回の調査は、箭渓川修繕事業に伴い実施したものである。県道福部鳥取線及び箭渓川西沿岸の標高3.4mを測る畑地に1ヶ所のトレンチを設定した。

第1.トレンチ(Tr-1) [第20・21図・図版5]

箭渓川沿いに設定した 2×6 mのトレンチである。表土は褐色砂で、第3層までは褐色系の砂・砂質の強いシルト層、第3層中にビニール片を含む。第4～6層は灰色系の色調で、第5層上面で暗渠とみられる北東～南西方向に軸を振る平行な2条の溝を検出したことから、第4層は旧水田耕作土と考えられる。第6層から粘土層となり、標高2.4mの第8層以下、暗青灰色系の小礫を含む粘土層である。

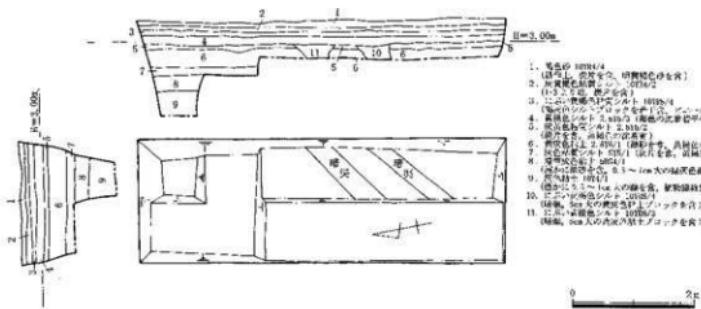
遺物は旧耕作土とみられる第3層中から2cm角程度の摩滅した土器片2点、第8層中から $2.4 \times 5.5 \times 0.3$ cmの板材片1点が出土している。

小結

調査地は丘陵裾部の箭渓川沿いということから砂質の耕作土以下は粘土を基調とした層序であり、堆積状況も順層である。造構も検出されなかった。



第20図 高江所在遺跡調査トレンチ位置図



第21図 高江所在遺跡第1トレンチ実測図

第6節 清水所在遺跡

調査地は袋川中流域左岸の国府町清水地内にあり、清水集落から西に約400m地点の丘陵上に位置する。調査対象地となった丘陵は、南北に延びる主稜線から派生した支稜で、標高にして85~105mあまりを測る。主稜線上には前方後円墳の清水1号墳(全長30m)が築かれ、他に6基(清水2~7号墳)が存在している。また、周辺丘陵には岡益古墳群、梶山古墳群等が所在し、梶山古墳群中には前面に石積みの方形壇をもつ変形八角形壇で、凝灰岩切石積の横穴式石室の玄室に魚、三角文、円文などの彩色壁画が施された梶山古墳(国史跡)が位置している。

今回の調査は、簡易水道整備事業に伴って実施したもので、事業地内二ヶ所に試掘トレンチを設定し行った。

第1トレンチ (Tr-1) [第22、23図・図版5]

尾根の稜線上に設定した 1.0×18.8 mのトレンチである。調査地の現況は、尾根の先端に向け緩斜面でとり、尾根の稜線幅は5m前後と狭い。第1、2層が表土である。厚さ10~15cmあまりの表上下は褐色粘質土(3層)となる。第3層は、軟岩が脈状に含まれることから地山とみられる。

遺構、遺物は検出されなかった。

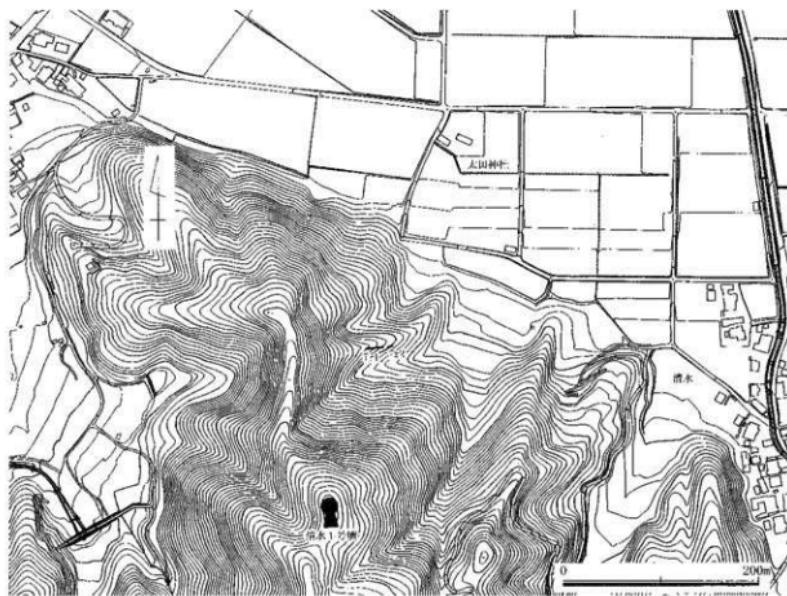
第2トレンチ (Tr-2) [第22、23図・図版6]

第1トレンチの下方3mで認められた傾斜変換点に設定した 0.9×6.6 mのトレンチである。トレンチ高位では表土(1、2層)下が褐色粘質土(4層)の地山となり、下位には地山より若干明るい褐色粘質土(3層)が堆積している。

地山を整形した状況は認められず、遺構、遺物は検出されなかった。

小 結

調査地の周辺丘陵には前方後円墳の清水1号墳をはじめ、他に6基あまりの古墳が存在し清水古墳群を構成している。また、浅い谷を挟んだ調査地の東側丘陵先端部には中世墳墓の存在が知られている。今回の調査地から遺構、遺物は確認できなかったが、丘陵の裾部には微高地が形成されており、袋川左岸の平野部を臨むこれらの微高地上に遺跡が存在する可能性が十分に考えられる。

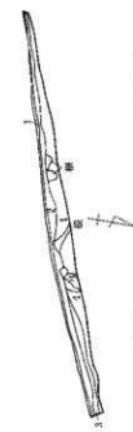


第22図 清水所在遺跡調査トレンチ位置図



第1 trench

H=100.0m



第2 trench

第23図 清水所在地第1・2トレンチ実測図

第7節 最勝寺山城跡

最勝寺山城跡は、河原町片山の靈石山頂部（標高280～330m）に位置し、西側を流れる千代川の流域や智頭往来を広範囲に一望できる要地に築かれている。郭は南北約300m、東西約400mにわたり、堀切や土橋などが比較的良好な状態で遺存している。同一丘陵の西側裾部（標高55m）に稻常城、南斜面中腹には最勝寺旧跡が存在する。

今回の調査は、デジタルテレビジョン中継放送所の建設に伴い実施したものである。調査地は、郭の西側にあたり、南西から北東方向に切られた堀切から西に約40m地点である。調査地の東側にはハンググライダーの基地が整備されている。

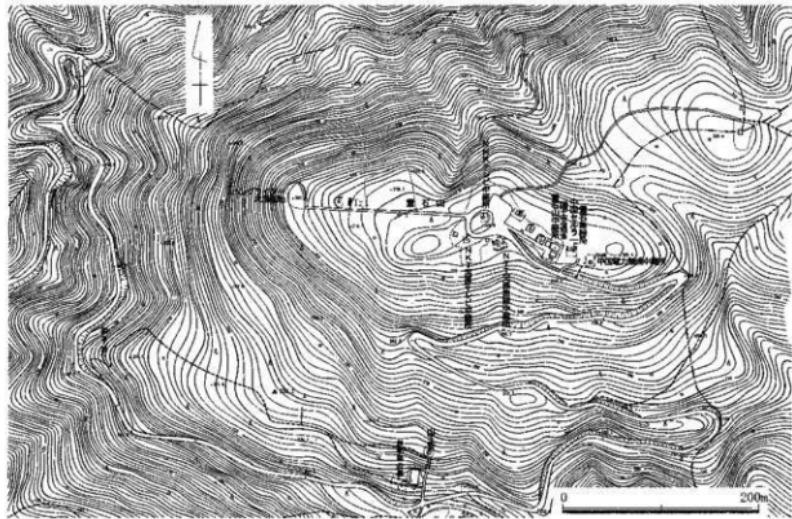
第1トレンチ（Tr.1）[第24、25図・図版6]

中継放送所の建設予定地全面に設定した3.0×7.9mのトレンチである。現況は西にわずかに下る緩い斜面となり、南側には歩道整備時の盛土が認められた。厚さ20～50cmあまりの表土の下層には自然堆積土とみられる暗褐色粘質土（2層）が堆積し、その下位に基盤層と思われる褐色シルト層（3層）が認められる。地山はにぶい赤褐色粘質土（5層）で、第2、3層は地山の傾斜に沿った堆積状況を示し、人為的に整形された痕跡は確認されなかった。

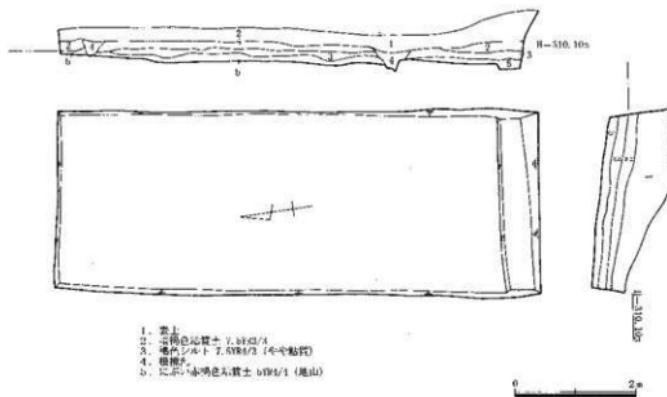
遺構、遺物は検出されなかった。

小 結

調査地は、堀切で区画された郭の西側頂部に当たり、頂部をわずかに下った丘陵斜面には郭とみられる平坦地が認められる。今回の調査では城郭に伴う遺構や遺物を検出することはできなかったが、靈石山頂一帯は、その眺望の良さから送信施設の建設計画が予想される地域であり、今後の整備計画に際しては十分な注意を払っていく必要のある地域である。



第24図 最勝寺山城跡調査トレンチ位置図



第25図 最勝寺山城跡第1トレンチ実測図

第8節 上土居遺跡

上土居遺跡は、JR河原駅から北西約1kmの県道鹿野気高線南沿いに位置し、今在家集落内の南側微高地に立地している。調査対象地から僅か20m北東には今在家古墳が観音堂として祀られ、内部主体の石棺横に弥生時代中期、後期の上器が置かれている。上土居遺跡の南側平野部及び丘陵上には、前山遺跡、郷原遺跡、山手古墳群、郷原古墳群など、弥生時代から中世にかけての集落跡や古墳群が数多く分布する。

今回の調査は、民間宅地建設に伴い実施したものである。県道南25mの、山手集落から北へ細長く延びる標高29m前後の微高地の水田に1ヶ所のトレンチを設定した。



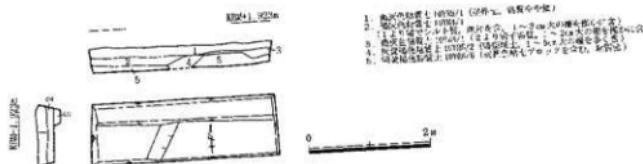
第26図 上土居遺跡調査トレンチ位置図

第1トレンチ (Tr-1) [第26、27図 図版6]

南北方向から伸びる尾根のほぼ接線上に設定した $1 \times 3\text{m}$ のトレンチである。表土より $15\sim30\text{cm}$ 弱掘り下げるところ地山と考えられる第5層明黄褐色粘質土が検出された。この面での遺構、遺物はみられなかつた。なお、水田耕作土中より近現代の陶磁器細片、瓦片、鉄片、プラスチック片が出土している。

小 結

今回の調査では遺跡の基盤層とみられる第5層を確認し、集落の形成などで少なからず上部が削平されている状況が見受けられた。今在家古墳の封土から出土したと言われる弥生土器の存在からも、今後注意をはらっていく必要がある遺跡と思われる。



第27図 上土居遺跡第1トレンチ実測図

第9節 東今在家所在遺跡

調査対象地は東今在家地区の東側約210m、国府町国分寺集落から北西に350m地点の水田部で、袋川左岸に形成された法美平野の西端に位置する。周辺丘陵には面影山、杉崎、津ノ井、今木山等の古墳群が位置し、群中には面影山73号墳（全長51m）、津ノ井9号墳（全長29m）、今木山2号墳（全長30m）が前方後円墳が所在している。また、法美平野には国史跡の因幡国跡や、大權守廢寺跡、国分寺などの前方後円墳が所在している。また、法美平野には国史跡の因幡国跡や、大權守廢寺跡、国分寺などの前方後円墳が所在している。

跡が確認されており、政治・経済・文化の中心として重要な位置をしめていた地域となっている。

今回の調査は、携帯電話基地局の整備に伴うもので、整備地内1ヶ所にトレンチを設定して実施した。



第28図 東今在家所在遺跡調査トレンチ位置図

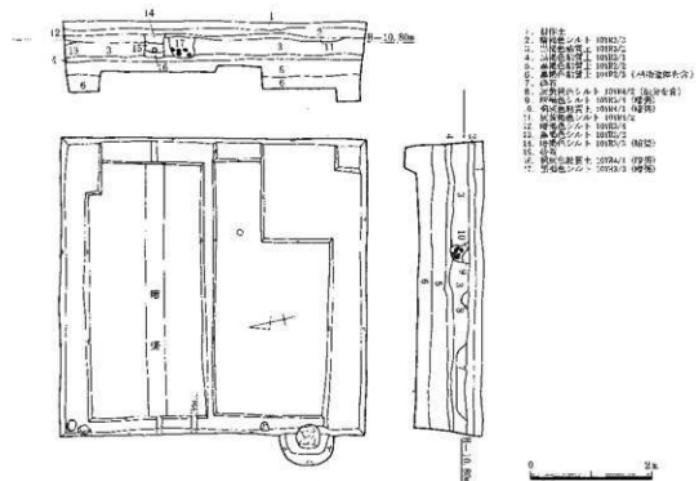
第1トレンチ (Tr-1) (第28、29図・図版6)

基地局の基礎工事箇所全面に設定した4.9×5.1mのトレンチである。地表面の標高は11.1m前後を測り、掘り下げは地表下1.3mまで行った。第10、17層の暗渠は、は場整備前の施設とみられ、第3層の上位層がは場整備以降の土層である。下層の第3層～6層はわずかに色調が異なるものの黒褐色粘質土が堆積しており、その層序から推測して安定的な地盤であったことがうかがわれる。トレンチ西壁の第3層から径40cmあまりの石が検出されたことから、一部拡張を行い精査したが遺構に伴う状況は見られなかった。

遺構は検出されず、遺物は、第2層から陶磁器片2、瓦質土器1が出土している。

小 結

調査対象地は国分寺集落の北西約350mに位置し、東側平野部には因幡国庁跡が所在している。今回の調査では遺構は検出されず、遺物についてもは場整備以降とみられる土層からの出土にとどまっている。しかし、位置的には国庁城の縁辺に当たることや、水田耕作時に土器片が確認されたとの情報もあることから、今後、十分注意を払っていかなければならない地域といえる。



第29図 東今在家所在遺跡第1トレンチ実測図

第10節 横枕前田遺跡

横枕前田遺跡は、鳥取市横枕字前田、JR鳥取駅から南南西に直線距離で約5.6kmに所在し、横枕集落東側の平野部に形成された標高48m弱の独立丘陵南裾に位置する。

横枕集落周辺では、縄文時代後期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代および中・近世の遺跡が、平野部の微高地土や丘陵裾、丘陵上に多く形成されており、対象地の隣接する丘陵上にも古墳時代前期から後期に亘る90基余りの古墳で構成される横枕古墳群が展開している。

今回の調査は携帯電話基地局新設計画に伴って実施したものである。予定地はこれまで遺跡の存在は知られていないかった地点であるが、本計畫が持ち上がった際に鳥取市教育委員会で現地確認を行った結果、耕作土中に土器片の散布が認められ、また隣接丘陵上に横枕古墳群も所在することなどから確認調査を実施することとなったものである。調査は遺構・遺物の確認に主眼を置いて、独立丘陵南西裾対象

地内の畠地に1ヶ所のトレンチを設定した。

第1トレンチ(Tr-1) [第30、31図・図版6]

独立丘陵の南西裾部で、標高29m強の畠地に設定した3×4mのトレンチである。厚さ約20cmの耕作土下に、部分的に厚さ10cm程度の遺物包含層である第3層（灰黄褐色粘質土）が認められ、その下、すなわち地表下0.15~0.3m程度で地山となる。この第3層上面および下面が造構面で、それぞれピット状造構3基（P-01~03）と、ピット状造構1基（P-04）および不明造構1基（SX-01）を検出した。

このうちトレンチ中央よりやや北寄りのP-01は平面円形の二段掘りで、直径84cm、深さ18cmを測る。埋土中から土師器および須恵器の摩滅した細片が僅かに検出された。P-02は平面円形で直径36cm、深さ4cmを測り、後述の溝状土層変化部を切る形で検出された。P-03は平面円形で直径40cm、深さ17cmを測り、埋土中からプラスチック片が出土している。またP-04はトレンチ南西壁断面での検出であるが第3層下面から掘り込まれ、幅30cm強、深さ38cmを測る。トレンチ南西側のSX-01は第3層下面から掘り込まれる。造構の北東側以外の三方向はいずれも調査区外へ広がるため規模は不明であるが、検出長3.1m、深さ0.9m程度で、埋土最上層から須恵器片2点が検出された。

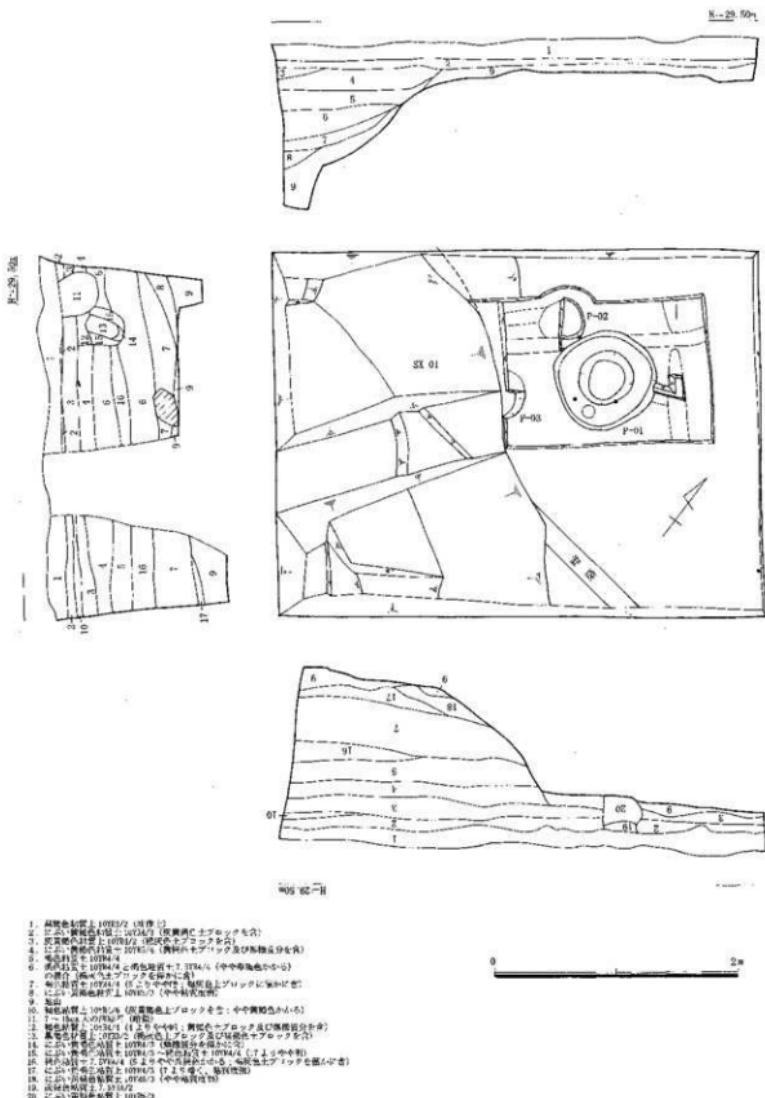
なおこれらの造構以外に耕作土から掘り込まれる暗渠1条を検出したほか、この暗渠を切る形の南西~北東方向に延びる幅10cm強、深さ2cm程度の溝状土層変化部やこれに平行あるいは直行方向に延びる同様の溝状土層変化部数条を検出した。

小結

調査の結果、調査地内から暗渠1条や溝状土層変化部3条、ピット状造構4基、不明造構1基を検出した。このうち第3層下面あるいは地山直上検出のP-01、04、SX-01はその性格は明確にできなかつたが、時期は僅かながら出土した須恵器片から古墳時代後期~奈良・平安時代初めの可能性が考えられる。またそれら以外の耕作土から掘り込まれる暗渠は現代で、それを切る形のそしてそれと同様の溝状土層変化部は現代耕作等に伴うものと考えられる。さらにP-02、03も切りあい関係やプラスチック片の出土から現代のものと考えられる。



第30図 横枕前田遺跡調査トレンチ位置図



第31図 横枕前田遺跡第1トレンチ実測図

第11節 松原所在遺跡

調査対象地は、JR鳥取駅から西へ約8.3kmの県道鳥取鹿野倉吉線に隣接して位置する。この湖山池南岸地域には、縄文時代から弥生時代、古代、中・近世の遺跡が多く形成されており、調査地の南西約300mには弥生時代から中世の集落遺跡である松原谷山遺跡が所在し、南東丘陵上には松原古墳群が造営されている。

今回の調査は、県道整備事業に伴い実施したものである。湖山池湖岸から約100mの県道南沿いの水田に1ヶ所のトレンチを設定した。

第1トレンチ (Tr-1) [第32、33図 図版6]

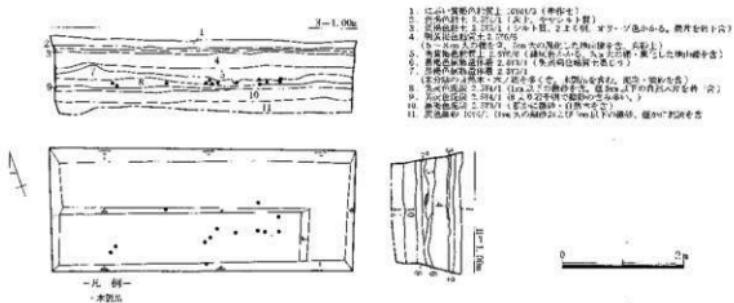
県道3.5m南側の標高0.8m前後を測る水田に設定した2×5mのトレンチである。表土である耕作土は15cm程度と薄く、第2層床土下に客土とみられる第3～5層黄褐色粘土、明黄色粘質土が標高0.15m付近まで観察された。以下、10cm程度の厚さで第7層黒褐色植物遺体層が認められ、自然木や木葉など未分解の植物とともに加工板や曲げ物、柄、箱形容器、下駄などの木製用具がコンテナ約1箱分相当量出土したが、土器は見られなかった。以下、第8、9層微砂を含む黃灰色泥炭、第10層自然木や僅かに木製品を含む黒褐色泥炭、標高0.15～0.4mは第11層灰色細砂である。

小 結

調査地は丘陵裾部西側に位置することから地形的に谷状の流路にあたり、第7層から出土した遺物は遺構に伴うものではなく二次堆積によるものと考えられる。出土した木製品も形状から昭和初期前後が推定される。また、いずれの層からも遺構は検出されなかった。



第32図 松原所在遺跡調査トレンチ位置図

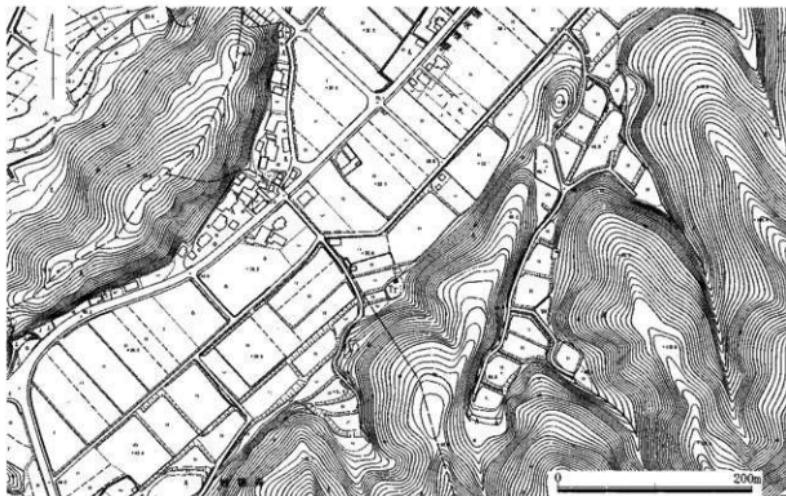


第33図 松原所在遺跡第1トレンチ実測図

第12節 妙德寺所在遺跡

調査対象地は、JR鳥取駅から南西へ約9.5km、湖山池南西湖岸から2.6km内陸の県道矢橋松原線南東約150mの丘陵側に位置する。丘陵に挟まれた250m幅ほどの谷平野部では上器片や古瓦の散布地域が複数あり、調査地から250m北には鶴尾片などが出土した吉岡大海廢寺跡推定地が所在する。また、調査地の東側丘陵には吉岡52、53号墳、西側には横穴式石室を内部主体とする妙徳寺1号墳、県道を挟んで対岸の丘陵上には50余基からなる吉岡古墳群が分布している。

今回の調査は、携帯電話基地局新設計画に伴い実施したものである。標高40mを測る丘陵裾の畠地に1ヶ所のトレンチを設定した。



第34図 妙徳寺所在遺跡調査トレンチ位置図

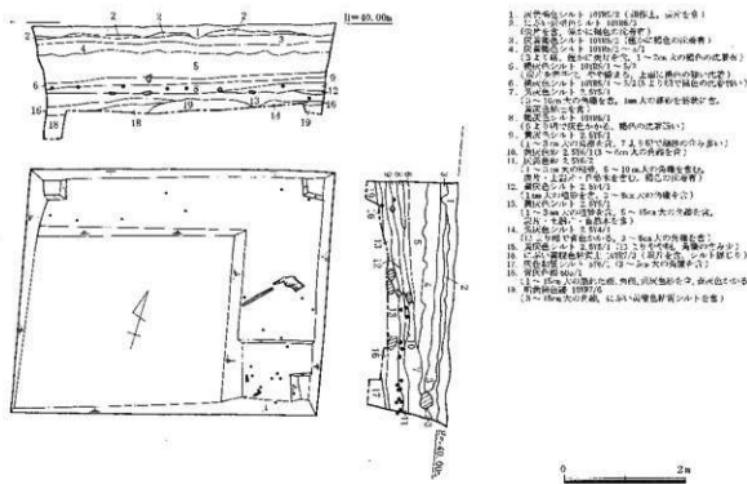
第1トレンチ (Tr-1) [第34、35、36図] 図版7、14]

北西面の段状となった畠地に設定した4×5mのトレンチである。傾斜平行方向の東壁面では、現地表面から50cm下までは凹耕作土と見られる平坦な灰黄褐色系のシルト層（第1～4層）が広がり、下層の第5層褐色シルト上面に褐色の強い沈着が認められた。第5層下は南から北側への傾斜が認められ、第5層以下は黄色系の角礫や砂礫を含む層が中心となる。第7層～第13層黄色シルトまでが遺物包含層であり、特に第10層黄灰色砂、第11層灰黄色砂中に3～10cm大の角礫や自然木に混じって土師器、須恵器細片が多く出土した。第13層をはじめ下層ほど大きな土器片が出土する傾向が認められた。以下、第16層にびい黄橙色粘質土、第17層灰色粘質シルト、第18、19層は1～15cm大の角礫層である。

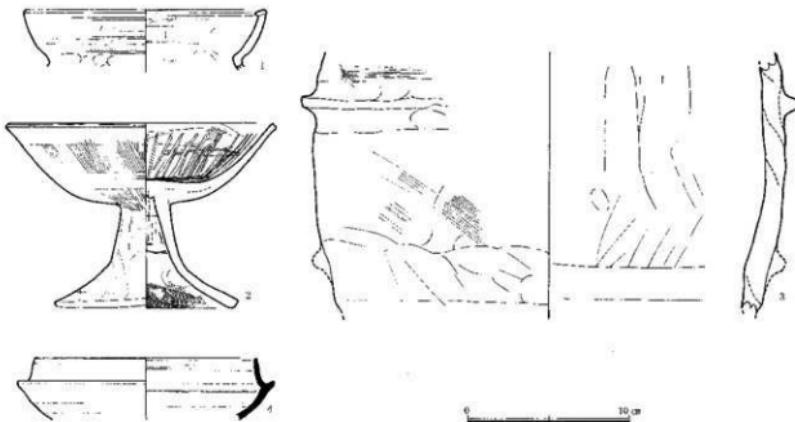
遺物はほぼ5世紀から6世紀前半代の時期であり、土師器壺、高杯、碗、須恵器蓋杯、壺、円筒埴輪とみられる胸部片などがコンテナ約1箱分相当量出土している。

小 結

調査地は丘陵の狭小な谷口部分にあたり、出土した遺物は谷上部の崩落などで多量の礫や流木とともに上石流的に流出したものと考えられる。遺物の出土量が比較的多く時期が限定されることなどから、調査地上位の丘陵については今後十分注意をはらっていく必要がある。



第35図 妙徳寺所在遺跡第1トレンチ実測図



第36図 妙徳寺所在遺跡第1トレンチ出土遺物実測図

第13節 布勢所在遺跡

布勢所在遺跡は、鳥取市布勢地内、JR湖山駅の南西約1.2kmで鳥取平野の西端に形成された潟湖である湖山池に面して位置する標高40m弱の独立丘陵（通称）「宇山」の西側斜面付近に所在する。この湖山池周辺には、繩文時代前期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡が多く形成されており、対象地も国史跡である前方後円墳の布勢古墳の西側に位置し、また戦国期の城館遺跡である県指定史跡天神山城跡の南に位置する。

今回の調査は、民間の宅地開発事業計画に伴って実施したものである。予定地は上述のとおり「宇山」と呼ばれる独立丘陵の西側斜面の一角であるが、この独立丘陵は戦国期に因幡国を支配した山名氏の居城である布施天神山城の一部あるいはそれときわめて重要な関係の場所として考えられてきた地区である。そのうち今回の調査対象地は古絵図にも「侍町」あるいは「侍屋敷」と記載された部分の近接地にあたるもの、これまで具体的な調査は昨年度に丘陵北東側裾部で僅かに行われたのみであった。このため、調査は遺構・遺物の確認に主眼を置いて丘陵斜面にはば並行する1ヶ所のトレンチを設定して実施した。

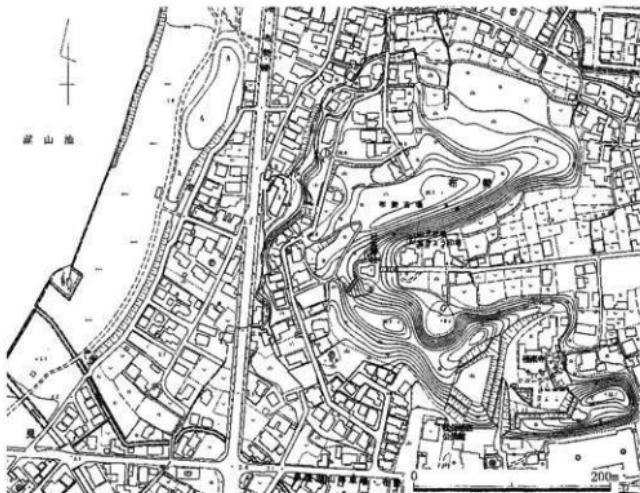
第1トレンチ（Tr-1）（第37、38、39図：複版見）

国史跡布勢古墳の西約40m、県指定史跡天神山城跡の南約400mで、湖山池および一般県道鳥取空港布勢線を見下ろす独立丘陵「宇山」の西側斜面造成地に設定した1×10mのトレンチである。標高は20m強で、地表面下約1.3~1.6m付近まではガラス瓶やコンクリート片等の現代ごみを含む客土がなされる。その下の一部に厚さ10cm程度の旧表土の可能性も考えられる第30層（黒褐色粘質土）が認められ、その下が地山となる。この地山直上からピット状遺構1基（P-01）と不明遺構1基（SX-01）を検出した。

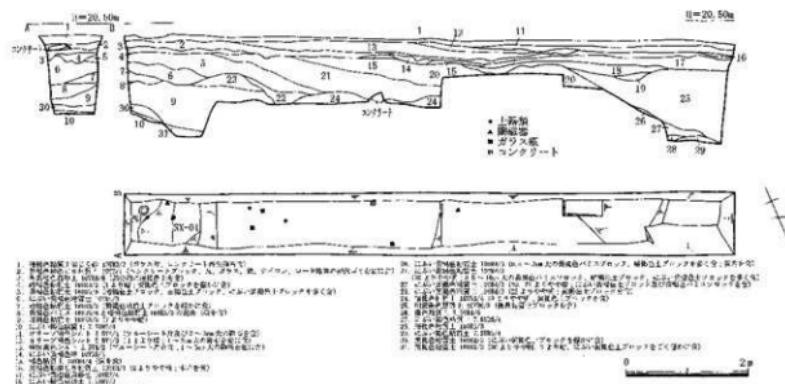
このうちP-01は、平面円形で、直径15cm、深さ10cm程度を測る。またSX-01はその全容は不明ながら深さは20cm程度を測り、土坑の可能性も考えられる。遺物は、客土中から現代のもの以外に土師器高杯片、須恵器体部片が、地山直上付近から土師皿片（第39図1）が僅かに1点検出されている。

小 結

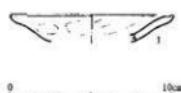
調査の結果、調査地周辺では地表面下1.3m前後までは昭和中頃の造成に伴う客土がなされているものの、それ以下には部分的の可能性は残るが、中・近世の遺構が遺存しているものと考えられる。



第37図 布勢所在遺跡調査トレンチ位置図



第38図 布勢所在遺跡第1トレンチ実測図



第39図 布勢所在遺跡第1トレンチ出土遺物実測図

第14節 天神山遺跡

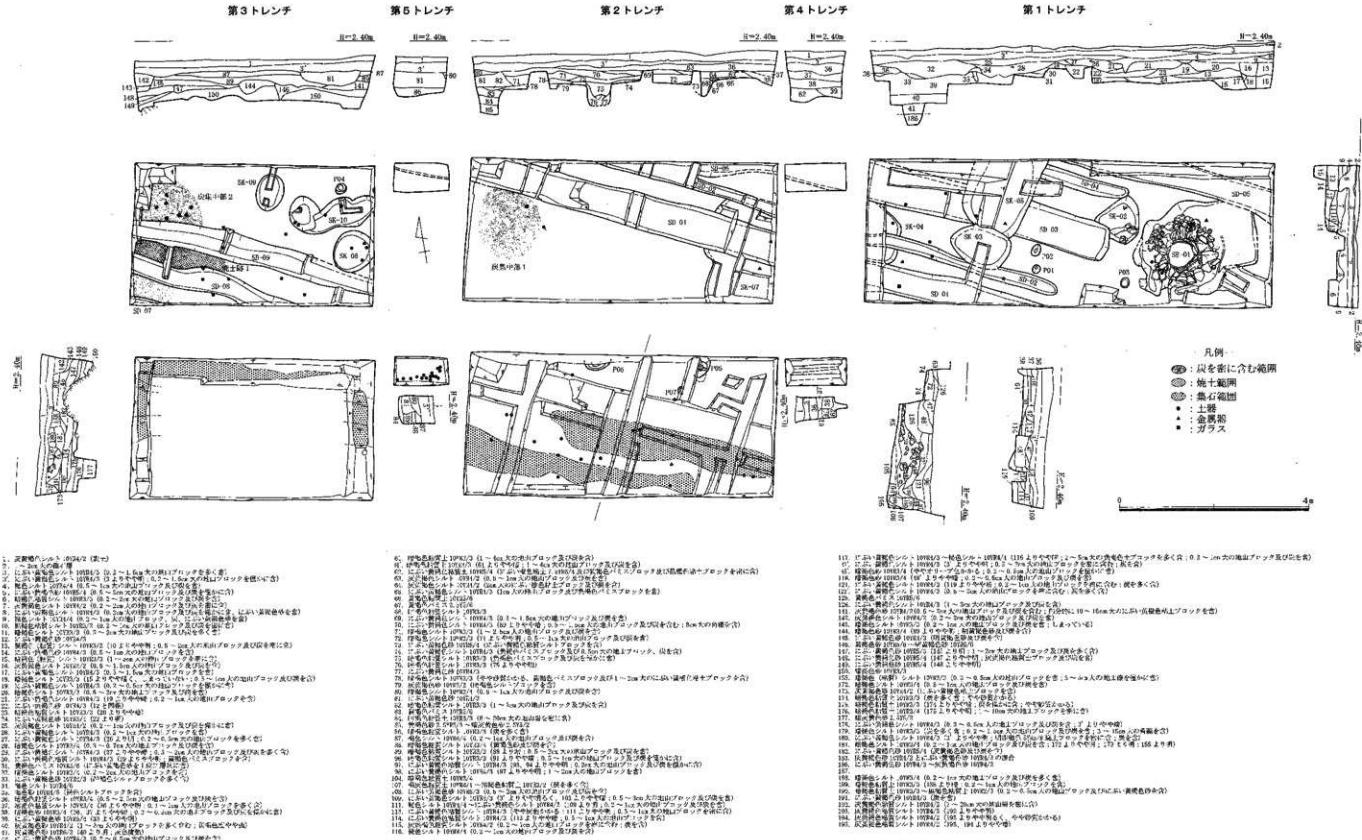
天神山遺跡は、鳥取市布勢地内、JR湖山駅の南西約1kmで鳥取平野の西端に形成された潟湖である湖山池に面して位置する標高25m程度の独立丘陵「天神山」周辺に所在する。この湖山池周辺には、縄文時代前期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡が多く形成されており、対象地付近にも戦国期の城館遺跡である県指定史跡天神山城跡が接する。また国史跡である前方後円墳の布勢古墳も対象地の南約400m、標高40m弱の独立丘陵（通称）「小山」上に位置する。

今回の調査は、天神山遺跡、天神山城跡のこれから保護・利活用を図っていくための遺跡の範囲や内容等の資料収集を目的として実施したものである。周辺には中世に因幡守護であった山名氏の守護所が置かれ、15世紀中ごろから16世紀中ごろにかけての約100年にわたって因幡の中心として機能していたことが知られている。当時の城郭の様子は『因幡氏談記』や『因幡大図』等の古絵図に何うことができるほか、山城部分については現在残る郭跡によっていろいろ判明している。しかしながらその周辺部分については、旧県立鳥取農業高等学校の新築移転以降開発が進む中で、部分的な開発に伴う発掘調査が行われてその一部が判明してきたのみで、全体像の解明には至っていないのが現状である。そこで今回は、文献調査やこれまでの発掘調査では当該期の状況が不明瞭な天神山の西側平野部の資料を得るために、当初東西方向に現有の樹木を残して一直線状に3ヶ所トレンチ（Tr-1～3）を設定して実施し、その後各トレンチ間に小トレンチ（Tr-4,5）を追加して実施した。

なお調査は資料収集で、後の再調査の可能性も考慮してできるだけ遺構や土層確認用のベルトは残し、調査後は人力による埋め戻しを行った。その際、例えば第1トレンチ検出の井戸は底部の井筒内には砂を入れ、その上の石組み井戸壁内には土のう袋を、さらに検出面には小シートをかぶせて遺構の保護等に努めるとともに、井戸内から出土した多くの石材についてはトレンチ北東隅に纏めて置くなどの配慮をして埋め戻しを行った。



第40図 天神山遺跡調査トレンチ位置図



第41図 天神山遺跡トレンチ実測図

調査地の基本層序 [第41図]

最東端部標高2.4m (Tr-1)、最西端部標高2.0m (Tr-3) を測る調査地の基本層序は次のとおりである。現地表面下0.2~0.45m程度は表土や近・現代の客土とみられる灰黃褐色シルト (第1, 7, 25層) やにぶい黄褐色シルト (第3, 3', 8, 109層)、暗褐色シルト (第32層)、暗褐色粘質シルト (第36層)、褐色シルト (第4, 9層)、にぶい黄褐色砂 (第5, 33層) が堆積する。その下面、標高約1.8~2.0m付近が中世以降の時期の同一面検出の第1造構面となる。

第1造構面下にはにぶい黄褐色シルト (第29, 70, 117, 121, 122', 126層)、にぶい黄褐色粘質シルト (第97層)、褐色シルト (第116, 87層)、暗褐色シルト (第71, 72, 78, 181層)、暗褐色粘質シルト (第23, 6, 82, 88, 89, 96層)、暗褐色粘質土 (第61, 61'層)、にぶい黄褐色砂 (第145, 182層)、灰黃褐色砂 (第141, 173層) や所々に飛砂とみられる薄い明黃褐色砂層が統き、その下の標高約1.5~1.6m付近が中世の第2造構面となる。

第2造構面下には、中世の造成土の可能性が考えられるにぶい黄褐色粘質シルト (第30層)、灰黃褐色シルト (第64層)、にぶい黄褐色シルト (第65, 74, 98層)、にぶい黄褐色砂 (第73層)、黄褐色バミス (第31, 67, 83, 125層)、黄褐色粘質土 (第66層)、暗褐色粘質土 (第84, 104, 174~176, 189, 190層)、にぶい黄褐色粘質土 (第62層)、暗褐色粘質シルト (第86層)、暗褐色シルト (第188層)、にぶい黄褐色砂 (第39, 73, 147~149層)、灰黃褐色砂 (第40, 79層)、灰黃褐色砂とにぶい黄褐色砂の混合 (第183層)、黄褐色~明褐色砂 (第146層)、暗褐色砂 (第150層)、灰黃褐色粘質シルト (第115層) が堆積する。

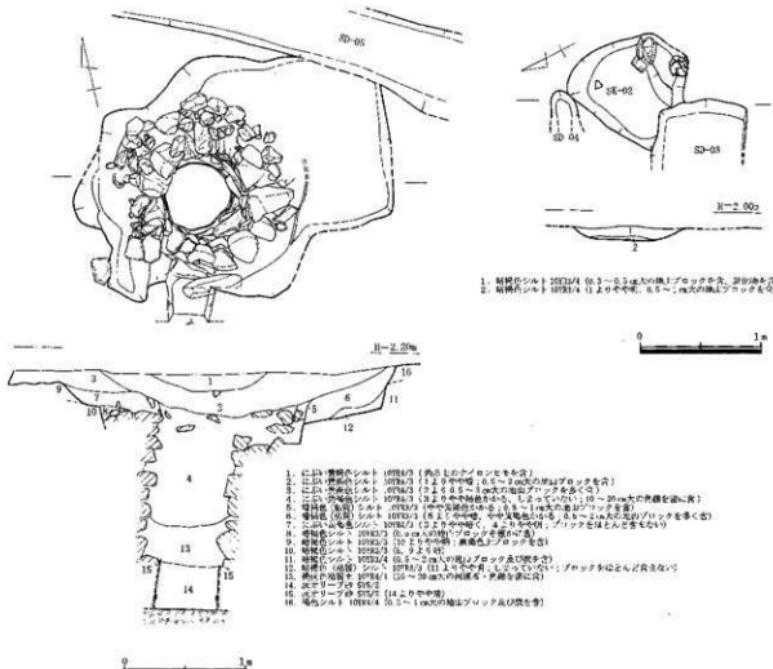
標高約1.1m以下には、灰黃褐色砂層 (第41層)、にぶい黄褐色砂層 (第186層)、黄褐色~暗灰黄色砂層 (第85層)、暗灰黄色砂層 (第177層) が堆積し、これらの砂層上から集石状造構を検出している。

なお挿図の土色番号には飛び番号があるが、本報告に記載していないものの現地調査では実測した他の断面上の土色番号がこれにある。

第1トレンチ [Tr-1] [第40~41図] [図版7, 8, 14, 15]

調査地の最東部、独立丘陵の南西端部近くに設定した8.55×3 mのトレンチである。第1造構面からは土坑4基 (SK-02~05)、井戸1基 (SE-01)、溝状造構5条 (SD-01~05)、ピット状造構3基 (P-01~03) を検出した。このうち土坑SK-02, 03は平面形は不定形で、規模はそれぞれ1×0.9m、深さ0.1mと1.3×0.9m、深さ0.25mを測る。トレンチ外へ広がるSK-04、05はそれぞれ検出長1.1×0.7m以上、深さ0.2mと1.3×1.8m以上、深さ0.2mである。埋土は、SK-04のものには特に多くの炭が含まれるがいずれも暗褐色シルトで、土師皿等の土器片および陶器片 (SK-02~05)、磁器片 (SK-03, 05)、管状土器製品 (SK-04)、ガラス片 (SK-03)、鉄器片 (SK-02, 04) が検出された。井戸 (SE-01) は平面円形の石組み井戸壁を持ち、内側底部に底のない桶状木製品を設置するものである。井戸壁は現況では上部に現代の搅乱が認められ、石壁も検出面より上位には突き出ないものの、廃棄の際のものとみられる埋土への石材投棄の量から、廃棄以前の井戸壁は検出面より突出していた可能性も考えられる。また石材には検出面から約0.7m下を境に上位は20~30cmの割り石が、下位は50cm程度の転石が使用され、やや組み方も異なる様子が見受けられ、後世に何らかの手が加わった可能性も考えられる。規模は、石組み壁遺存高1.2m以上、内径0.6~0.7m、桶状木製品の遺存高0.4m程度、同内径0.5~0.55mを測る。井戸底の標高は0.1mで、現在の井戸内水位は標高0.7m程度である。遺物は造構埋土上位~中位から土師皿、須恵器片、陶器片、磁器片、鉄器片、石器、60cm弱の用途不明石が、井戸内埋土中位~下位から土師皿、陶器片、土鍤、弥生土器片が検出された。図化した(6) (14) (15) (31)は井筒内埋土、(23) (28) (30) (32)は埋土上位~中位の出土である。このうち皿(6)は復元口径13.8cm、0.5mm以下の砂粒を多く含む胎土で色調は淡褐色、ナデ調整で底部外面には成形時の圧痕が認められる。(14) (15)はそれぞれ遺存長3.45cm、3.35cmを測り、前者は中央がやや膨らみ、後者は幅に変化が少なく細長い管状の土器製品である。(23)は復元底径17.6cmの備前窯とみられる陶器底部片で、1mm以下の砂粒を多く含む胎土には2.5

mmの砂粒を含み、外面の色調は赤褐色系である。長軸外側辺に加工を施した(28)は、一端辺に使用痕が認められ、石斧の未成品あるいは未成品を何かに転用しようとした可能性も考えられる。用途不明石(30)は、縁辺部の一部に割った際のものとみられる加工痕が、また片平面上には同方向の深さ1.5mm以下の数条の条線が3ヶ所以上に認められ、さらにその上には磨ったようなその後の使用痕も認められる。口縁部(31)は端面に4条の平行沈線とその下端部に刻み目を施す。溝状構造はいずれも東南東～西北西方向に延び、SD-01, 03, 05は断面隅丸長方形で幅50～70cm前後、検出深40cm前後でSD-03の南東端以外はトレンチ外へ続き、Tr-2に統くものも含めると検出長はそれぞれ12.7m以上、8m以上、5m以上である。またSD-02, 04は、断面逆台形状で幅20～30cm、検出深10cm程度でいずれも北西側はトレンチ外へ続き、検出長はそれぞれ10.6m以上、1.9mである。遺物は、僅かに灯明皿を含む土師皿等の土器片(SD-01～03, 05)、すり鉢他の陶器片(SD-01～03)、磁器片(SD-01)、瓦片(SD-01)、ガラス片(SD-03)、鉄器片(SD-01)、銅鏡(SD-03)が検出されている。図化した(24)はSD-03出土の備前産のすり鉢で、平底の底部のみの遺存である。胎土は0.5mm前後の砂粒を多く含み、色調は赤褐色である。内面には9条単位の条線が底部でわずかに重複して放射状に施される。また銅鏡(32)は「聖宋元寶」である。なお遺構の性格としては、明治30年測図・昭和7年修正測図地形図、古者の話等から桑の耕作に関するものと考えられる。ピット状遺構(P-01～03)は径20cm前後、深さ15cm前後で、埋土は暗褐色シルトであるが、遺物は出土せず、詳細は不明である。なおそれぞれの遺構の時期は、出土遺物と切り合ひ関係等から、SE-01、SK-02, 04が中世、SK-03, 05、SD-01～05が近代以降と考えられる。



第42図 天神山遺跡第1トレンチ井戸(SE-01)・SK-02実測図

第2トレンチ(Tr-2) [第40、43~45層・図版8、9、14、15]

第1トレンチの西2m弱に設定した6.5×3mのトレンチである。第1造構面下についても造構確認のため、縱横にサブベルトを残して堀下げを行った。第1造構面からは、上坑1基(SK-07)、第1トレンチから続くものも含めて溝状造構4条(SD-01~03, 06)、炭集中部1ヶ所(炭集中部1)を検出した。このうちトレンチ外へ広がる上坑(SK-07)は平面形は不定形で、検出長2.2以上×0.9m以上、深さ0.1mである。第1トレンチのSK-04と同様に多くの炭を含む埋土からは、土師皿他の上部器片、磁器片、鉄器片が検出された。溝状造構としては、SD-03に切られSD-02を切るSD-06がトレンチ外へ続くものの、規模は幅0.3m以下、深さ0.1m弱で、埋土の灰黄褐色シルト層から土師皿、砥石、ガラス片が検出された。図化した(8)(27)のうち皿(8)は、復元口径15.6cm、胎土は0.5mmの砂粒を含み、色調は淡黄褐色で、指成形、ナデ調整である。(27)は砥石で、長軸方向の3面に使用痕が認められる。また調査区西側検出の炭集中部1は、明瞭な掘り方は認められなかつたものの炭片に混じって土師皿や陶器すり鉢が検出されている。図化したすり鉢(22)は、胎土に1mm以下の砂粒を多く含み、色調は外面淡橙褐色、内面黄褐色で意外にやや硬質である。内面には9条以上の条線が単位を持って放射状になされているものとみられる。在地産か越前系の可能性が考えられる。なおそれぞれの造構の時期は、出土遺物と切り合い関係等からSK-07と炭集中部1は中世、SD-06が近代以降と考えられる。

この第1造構面から20~30cm程度下で、造成土と見られる黄褐色バミスブロックを含むにびい黄褐色シルト(第74層)等の上面が第2造構面で、ピット状造構3基(P-05~07)が検出された。規模は、P-05は径0.4m以上、深さ0.4m、P-06は径0.5m以上、深さ0.5m程度と比較的規模が類似し、P-07は径0.4m、深さ0.2m程度である。いずれも埋土は主に褐色あるいは暗褐色のシルト層で、P-05からは土師皿、土鍤が検出されている。時期は中世とみられる。

さらにこの下の厚さ40~50cm程度の造成土とみられる黄褐色バミスブロックや8~20cm程度の軟岩ブロックを多く含む堆積土(第74, 84層等)、あるいは黄褐色バミス層(第67, 83層等)を除去するとこの周辺のベース土である古砂丘とみられる黄褐色~暗灰黄色砂層となり、その上から集石造構が検出された。平面的には、西北西~東南東方向にトレンチ外へ続き、断面は逆三角形状に10~20cm強の石が積み上げられる。規模は、幅0.5~1.4m、高さ0.5~0.6m程度で、Tr-3検出のものに続くものとすると、検出長は13.7m以上である。遺物はペースの黄褐色~暗灰黄色砂層上位やにびい黄褐色砂層から土師皿、土鍤、瓦質の羽釜片、陶器のすり鉢片が、集石上の堆積土から同じく土師皿や陶器のすり鉢片等が検出されており、中世の造構と考えられる。

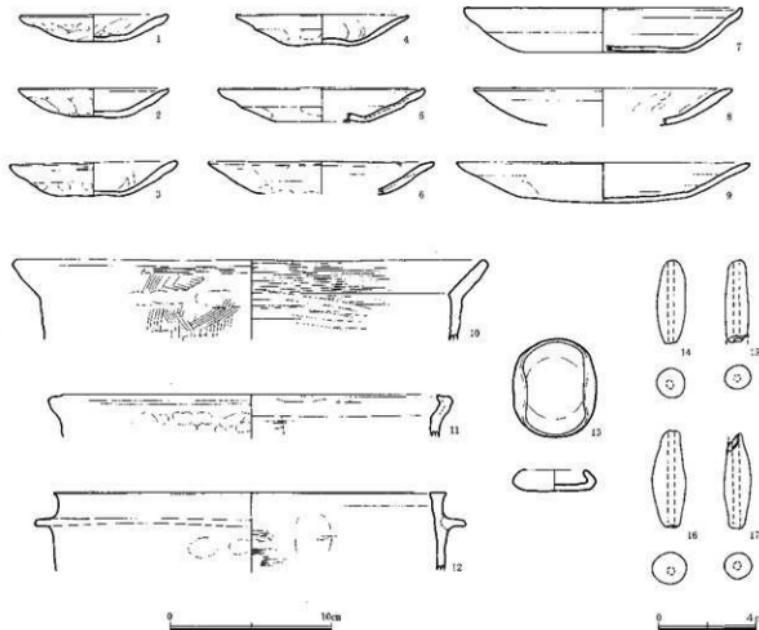
なお包含層遺物として、(10)~(12)(16)~(19)(21)(25)(29)(33)を図化したが、いずれも第1造構面以下の包含層出土遺物で、(25)は第1造構面直下層、(18)と(33)が集石造構より南側の集石造構上層に中、(12)が集石造構直下層の検出である。このうち(10)は外面に煤が多く付着する土師質の鍋で、推定口径28.6cm。口縁部は外傾して直線的に開き、端部に面を持つ。外面ハケ目、内面横位のハケ目調整で、色調は淡黄褐色である。瓦質の鍋(11)は、推定口径22.8cmで、外面に薄く煤が付着する。受け口は簡略化され、外面は指成形後ナデで、口縁部の端部はヨコ位のナデ、体部内面は原体不明のナデが認められる。色調は灰色である。(12)の瓦質の釜には外面にべつとり煤が付着する。推定口径22cmで、体部から口縁部までわずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデで、鍋部以下外面は指成形後ナデ、内面は横方向のナデ調整である。(16)(17)はいずれも中央が膨らむ管状の上製品である。それぞれ遺存長3.96cm、3.92cmを測る。(18)(19)は備前産の壺とみられ、前者は、推定口径16.8cm、玉縁口縁で、自然釉の肩部には波状文がなされる。色調は淡赤褐色である。後者は復元口径9.6cmの小壺で、自然釉の肩部の色調はやや暗赤褐色である。鉢(21)は残存率が悪いが、推定口径は25.8cmで、色調は赤褐色を呈する。備前産とみられる。青磁の高台部(25)は底径4.1cmを測る。窓内無釉で、施釉部の色調は緑灰色を呈する。貫入が認められる。(29)は茶白の下白受皿部分とみら

れ、受皿の推定径は31.8cmである。また銅鏡(33)は「皇宋通寶」とみられる。

第3トレンチ(Tr-3)(第40、43~45図・図版9、10、15)

第2トレンチの西約2mに設定した5×3mのトレンチである。第1遺構面からは、土坑3基(SK-08~10)、溝状造構3条(SD-07~09)、ピット状造構1基(P-04)、焼土跡1ヶ所(焼土跡1)、炭集中部1ヶ所(炭集中部2)を検出した。このうち土坑の平面形は、SK-08はほぼ円形、09は楕円形、10は不定形で、規模はそれぞれ0.9×0.8mで深さ0.1m、0.8×0.6mで深さ0.12m、1.8以上×0.6mで深さ0.1~0.2mを測る。埋土は、主にぶい黄褐色シルト層で、遺構内からは土師皿(SK-08~10)および陶器片(SK-09, 10)が検出された。溝状造構はいずれも東南東~西北西方向にトレンチ外へ続き、規模はSD-07は幅0.2m以上、深さ0.3m弱、検出長0.9m以上、SD-08は断面浅い皿状で幅0.4m、深さ0.1m程度、検出長4m以上、SK-08に切られるSD-09は断面不定形で幅0.5m程度、深さ0.25m、検出長5.35m以上である。埋土はSD-07と08がにぶい黄褐色シルト層、09が暗褐色シルト層で、SD-08からは土師皿、陶器片が、09からは上師皿、陶器片、磁器片、上鍤が検出された。ピット状造構(P-04)は平面楕円形で規模は0.25×0.2m、深さ0.1m、埋土はにぶい黄褐色シルト層である。またトレンチ西側からSD-08と09に切られる形で焼土跡1を、さらにSD-07~09および焼土跡に切られる形で炭集中部2を検出した。前者の範囲は検出長2m、遺存幅0.4m程度で、後者は1.3×2.5m程度である。後者からは多くの上師皿と僅かながら陶器片が検出されている。なおそれぞれの遺構の時期は、出土遺物と切り合い関係等から前後関係はあるもののいずれも中世以降と考えられる。

第1遺構面下については、第2トレンチからの集石遺構の状況を確認するに止ることとし、東、北、西の壁面に沿ったサブトレンチ掘下げを行った。その結果、集石がさらに西に延びることが判明した。



第43図 天神山遺跡出土遺物実測図(1)

なお包含層遺物として、(13) (20) (26) (34) を図化したが、いずれも第1造構面以下の包含層遺物である。(13) は手づくね成形後に両側縁を内側に折り曲げて耳とした耳皿で、口径5.15~6.0cmを測る。すり鉢(20)は、推定口径24.0cmで色調は暗赤褐色。備前窯とみられる。高台部(26)は底径3.9cmを測り、高台は無釉で内面に釉が施される。瀬戸窯とみられる。銅鏡(34)は不明瞭ながら「開元通寶」か。

第4トレンチ(Tr-4)〔第40、41図・図版10、14〕

第1~第2トレンチの間で、それぞれの北側壁の延長上に設定した1.3×0.6mのトレンチである。断面観察からSD-03とみられる幅0.25m以上、深さ0.3m強の溝状遺構を確認したが、トレンチ内からは遺物は検出されなかった。

第5トレンチ(Tr-5)〔第40、41、43図・図版10、14〕

第2~第3トレンチの間で、それぞれの北側壁の延長上に設定した1.1×0.6mのトレンチである。断面観察からSD-01とみられる幅0.4m以上、深さ0.3m強の溝状遺構を確認したほか、造成土とみられる8~20cm程度の軟岩ブロックを多く含む暗褐色粘質土(第84層)直上から多くの炭片とともに密集した状態の土師皿を検出した。このうち(1)~(5)(7)(9)を図化したが、口径から10cm未満の(1)(2)、10~15cmの(3)~(5)、15cm以上の(7)(9)に大別できる。口縁部はゆるく外反し、指押さえ、ナデ調整で、色調はおおむね淡橙褐色~淡黄褐色である。いずれも中世の遺物である。

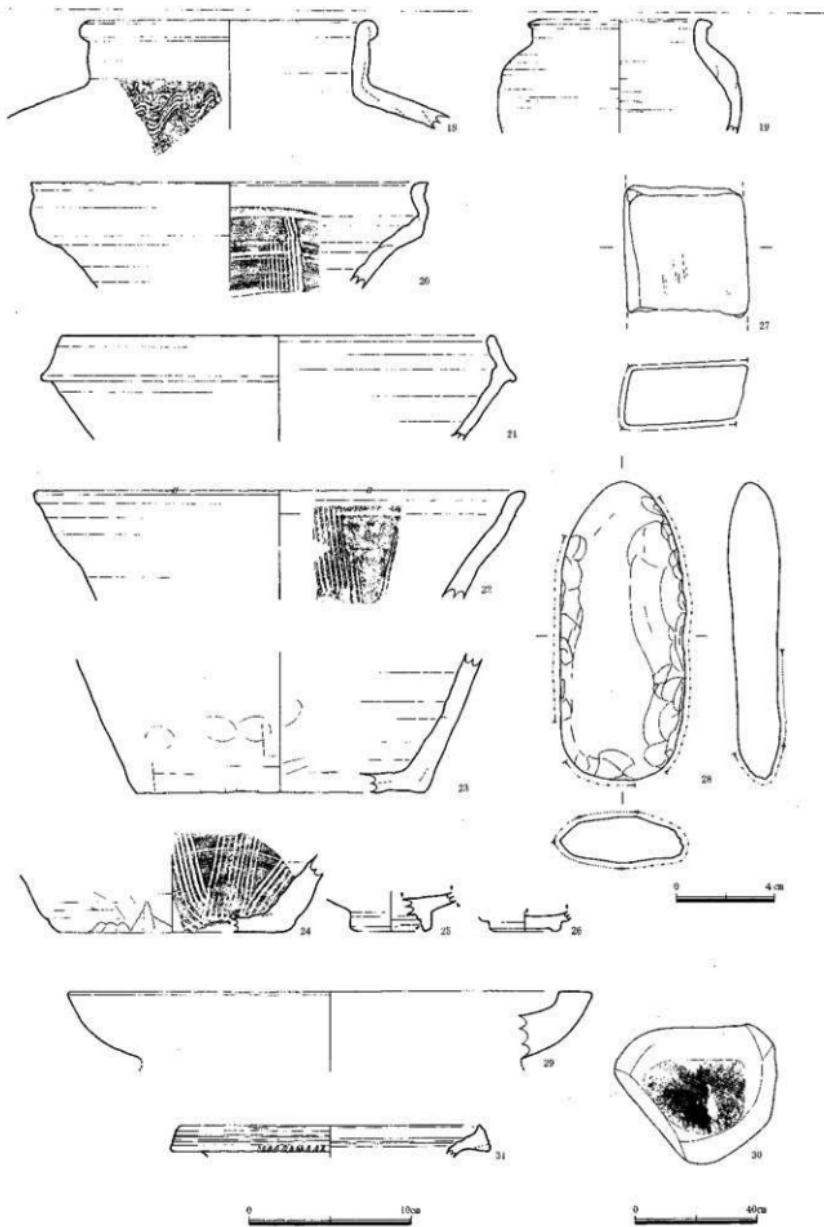
小 結

調査の結果、現地表面下0.2~0.45m程度は表土や近・現代の客土が堆積しその下に第1造構面、さらに20~30cm程度下に第2造構面が遺存し、さらにその下から厚さ40~50cm程度の造成土とみられる堆積土が検出された。その下は周辺のベース土である砂壇である。

遺構は井戸、土坑、溝状遺構、ピット状遺構、集石遺構の他、焼上跡や炭集中部が検出されている。時期としては出土遺物等から、土坑のいくつかと溝状遺構は近代以降のものと考えられるが、そのほかは中世のものと考えられる。このうちの井戸は、その意味については今後の研究有待たなければならないが、この位置での検出には今後の調査に対して大きな意義を持つものとなった。またトレンチの北壁部分から検出されたP-05と06のピット間距離は約2.2mで、調査範囲内では他に同規模のピット状遺構は検出されておらず掘立柱建物等の可能性を考えると、トレンチの北側には注意が必要である。さらに集石遺構についてみると、その上の堆積土には、北側は大きな軟岩地山ブロックや黄褐色バミス等の造成土とみられる埋土であるのに対し、南側にはそれらのバミスやブロックは全くなく、代わりに黒褐色粘質土の堆積が認められるなど、集石遺構を境に堆積状況に違いが見受けられる。このことは遺構の性格はまだ明確ではないものの、何らかの境界を表している可能性も考えられる。

遺物については調査地全域で5コンテナケースほど出土しており、その中でも土師皿が多く出土している。いわゆる京都系の皿と見られ、今回の調査では糸切りの底部を持つものではなく、灯明皿として使用した痕跡の認められるものもごく僅かである。造成土直上あるいはそれより上層の検出で必ずしも遺構に伴うとは限らないものの、炭片の集中する位置からまとまって検出される傾向も見受けられる。祭祀的要素の強い耳皿の出土とともに合わせると、その使用方法には検討が必要で、ひいては天神山西側の調査地周辺についての城館内での意味の再検討にも繋がる重要な出土状況である。また、備前窯の陶器が多く出土したことも特徴といえる。時期は中世、おおむね16世紀代で、ほぼ天神山城の時期と合致する。

なお今回の調査地である天神山の西側地域はこれまでの城跡研究ではあまり顧みられてこなかった地域である。しかしながら地下上位には搅乱が著しいものの、それ以下には遺構が比較的良好な状態で遺存していることが判明した。これまでの周辺調査と今回の調査、そして今後の調査研究によって天神山城の全体像、そしてそれ以前の遺跡の様子を解明していくいかなければならない。



第44図 天神山遺跡出土遺物実測図（2）



第45図 天神山遺跡出土遺物実測図（3）

第15節 烏取城跡

1. 遺跡の位置と環境 [第1図]

久松山頂に築かれた中世城館にその起源を持つとされる烏取城が、現在の山下に展開し始めるのは室町期以降と考えられる。羽柴（豊臣）秀吉が天正8・9（1580・81）年二度にわたって行った因幡攻めの後、烏取城には秀吉の武将宮部継潤が置かれるが、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いで西側に守し滅亡した。その後代わって入城した池田長吉は城域の大改修を行い、近世烏取城の基礎を作りあげた。元和3（1617）年には姫路城主池田光政が因幡・伯耆国32万石の烏取城主として転封した後、寛永9（1632）年には岡山藩主池田光仲と交代し、以降幕末まで光仲の子孫が藩主の地位を継いだ。

長吉の大改修以降、度重なる改修を経て幕末期を迎えた烏取城であるが、明治期に入ると廃城令の下陸軍省による解体が進み、明治12（1879）年には最後まで残っていた二ノ丸三階櫓を含む建物類の破却をもって完了したとされる。明治22（1889）年には尋常中学校がこの地に移転開学し、第一中学校を経て現在の烏取西高等学校へと至る。

2. 平成18年度調査の概要 [第46・59図]

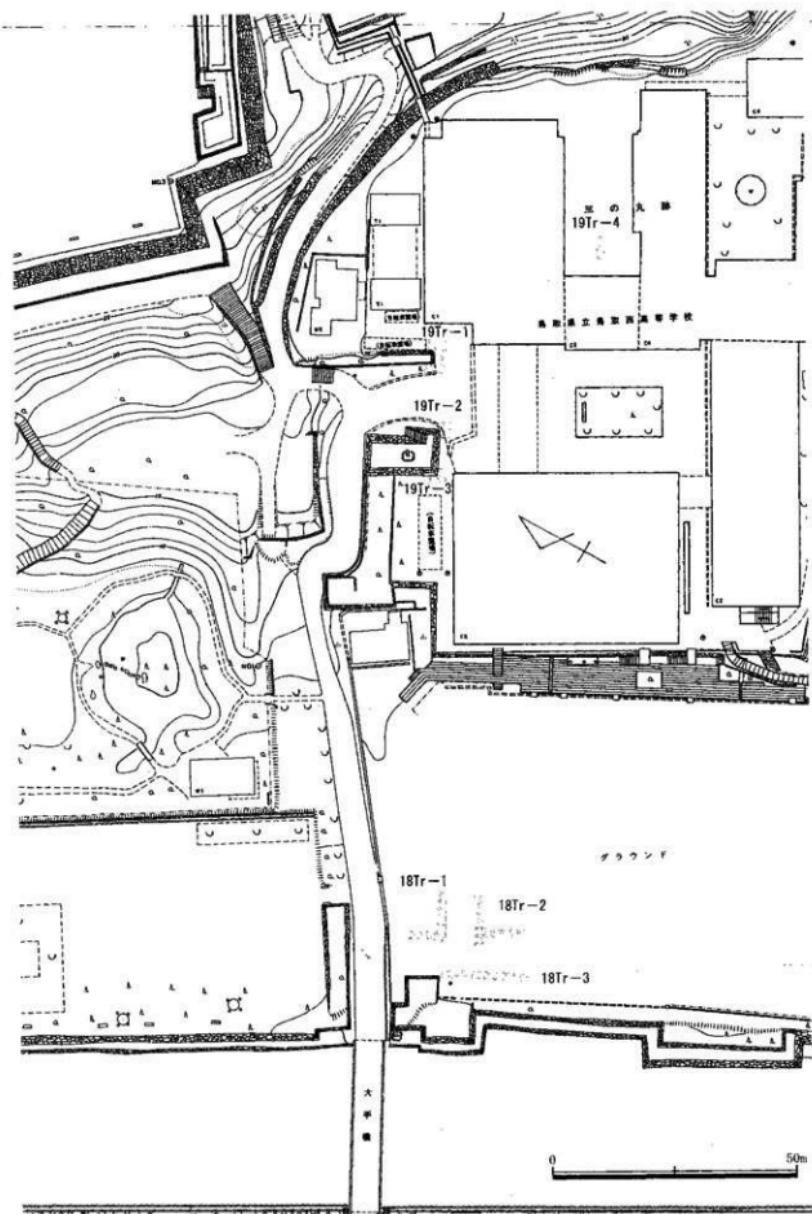
今回報告する平成18年度の試掘調査は県立烏取西高等学校改築に伴う事前調査として実施したものである。中ノ御門周辺（現住の高校第一グラウンド内）で行ったもので、幕末期に近い城絵図を参考として建物が位置していると考えられる部分に3ヶ所のトレンチを設定した。第60図の通り本丸、大手橋を渡った正面には枠形石垣および中ノ御門があり、門を抜けると御番人小屋や御番所等があったとされる。

先の試掘調査の結果から上層には固められたグラウンド整地土が厚く堆積することが確認されていたため、これらについては重機を用いて除去した。

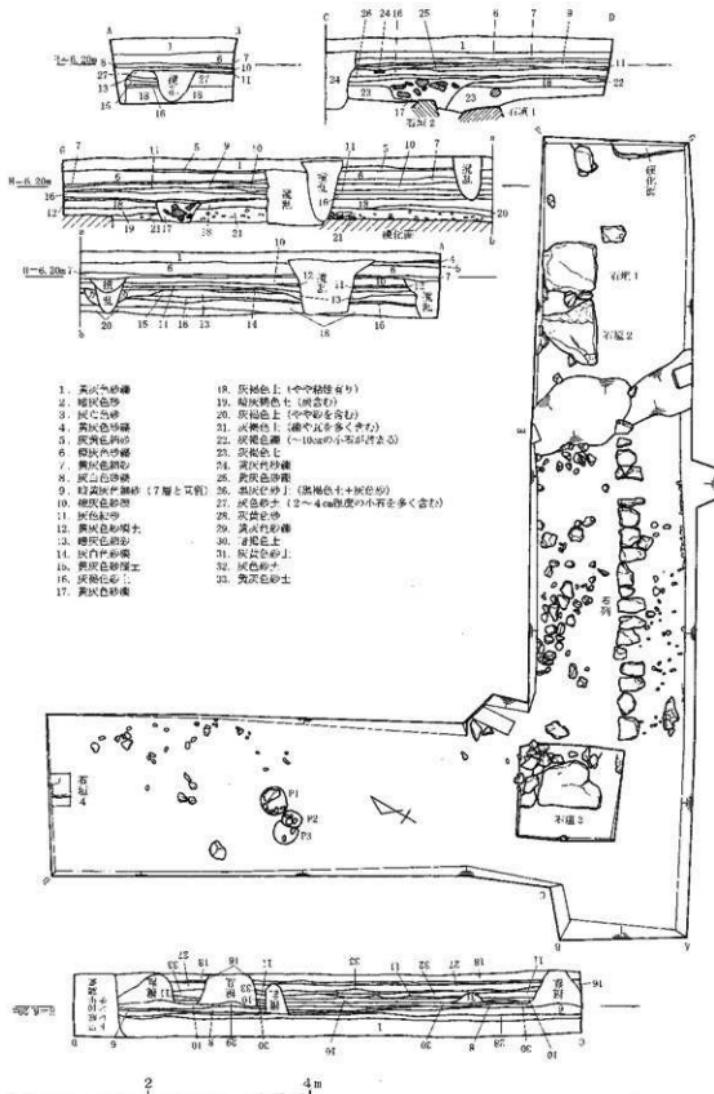
①18年度第1トレンチ（18Tr-1）[第47図、図版11]

中ノ御門枠形右垣推定部分に設定した7.5×9.5mの逆「L」字形トレンチで、直交部分には1m四方のサブトレンチを設けた。標高6.5mの地表から6m付近までは厚さ5cm程度の黄色系砂礫を土体とするグラウンド整地層が互層状に堆積している。その下には灰褐色土である18層がトレンチ全体にみられ、さらに下層については、E-F面では検出された石垣を覆うように23層があり、G-A面では瓦片を多量に含む21層がみられる。21層下には瓦の碎片と小石片をコンクリートのように固めた道路状の硬化面があり、トレンチ東端でも同様の面が存在する。石垣および石列を検出したため現在の深さで掘削を終えているが、幕末期までの生活面には至っていないと考えられる。

遺構は石垣・石列・ピットを検出した。石材には便宜的に石垣1～4の番号をついているが本来は一連の石垣である。石垣1～3については7～80cm四方の大型石材を用いており、石垣4については平成10年度の調査で石垣の一部であることを確認している。本来は石垣1・3を角にして直線状に伸び、



第46図 島取城跡調査トレンチ位置図 ($S = 1/1000$)



第47図 18年度鳥取城跡第1トレンチ実測図 (S=1/60)

- 桁形石垣を構成していると考えられる。石垣 2 と 3、3 と 4 の間は現状でこそ確認できぬものの下部に石垣が遺存している可能性は高いであろう。また、石垣 2 と 3 の間および 2 の周囲にみられる 10~20cm 程度の石は、形状からみて本来は石垣に伴う礎石と考えられる。さらにこれら推定石垣ラインに沿うように 4m 程の石列がある。石列は 3~40cm 程度の表面が平らな石を並べたもので、石垣側に向かい面を備え、南東側（グラウンド側）は前述のとおりコンクリートとのような硬化面がみられる。石垣解体時の影響を受けていないため解体後に敷設されたと考えられる。大正期の写真から解体後も桁形部分がマウンド状に一段高くなっている状況が確認できるため、これらマウンドに沿う溝的なものと推定できる。ピット状遺構は 3 本あり柱の基礎部分と考えられ、2~30cm の円形内に石がみられる。

②平成18年度第2トレンチ(18T-2)【第48図、圖版II-12】

推定御番所・大腰掛・水路跡部分に設定した南北 11.5×東西 11m の「T」字形トレンチである。標高 6.5m 前後の中土より標高 5.9~6m 付近までは 5~10cm 程度の薄い層が重なり合う。これらの多くは黄色系の砂疊層でありグラウンド整地のために敷かれたものと考えられる。これ以下は各地点で状況が異なってくる。A-B 面では 11・13・14 層などの比較的厚い層があり、14 層下には瓦片が詰められた溝を検出し。さらにサブトレンチ部分をみると瓦溝の左右には 66~69 層からなる砂疊主体の整地層が確認でき、これらを切り込む形で 64 層が広がる。灰褐色土である 64 層には拳大の石を中心とした石が多く含まれており、一部には被熱し赤片したものもあったが、焼面の向きは一定しておらず、被熱した後に廃棄されたような様相を呈している。また、同層には焼土と考えられる炭の含まれた土もみられる。さらに下層にも炭片を含む 70・71 層があり、その下は青灰色のシルト層がみられる。C-D 面では 5.6m 以上は水平堆積であるのに対し、それ以下の層は東側（山側）へ向かい緩やかに傾斜しており、30 層以下で確認でき 31・32 層で顕著である。いずれも整地層と考えられ、砂および砂疊主体のかなり縮まった層であり、35 層の上面は黒く硬化していることからもこれらの層は旧登城路の路面であったと推定される。また、同様の状況は対面の E-F 面でもみられ 61 層以下緩やかに傾斜しており、63 層でも 35 層同様上面が黒く硬化している。また、図上では 1 層として扱っている中にも 1cm 単位で瓦層状に整地されている層もある。また、西側へ向かい瓦片を多く含む 19 層が 20cm 程堆積しており、これらを覆う形で黄灰色砂疊の整地層（56 層、C-D 面では 15 層）がある。また、58 層や 73・74 層のように大きく掘り返したような痕跡がみられる。

遺構は瓦溝・瓦溜・ピット・溝状遺構を確認した。瓦溝は標高 5.6m 付近より深さ 20cm、幅 40cm の断面半円形状の掘り方内に 10~15cm 程度の半瓦片を詰めたものである。溝内の瓦片は磨滅がみられ、遺構の性格は不明であるが、建物の周囲を巡る雨落溝や暗渠施設の可能性がある。瓦溜は標高 5.4m 付近に 2ヶ所で検出し、直徑 60cm ほどの円形の掘り方内に 10~15cm 程度の平瓦片を詰めているものである。ピット状遺構は直徑 60cm の円形を呈す。溝状遺構はサブトレンチ部分で検出したものでわざかに 10cm 程度の段差が認められるのみで、全容は不明である。

③平成18年度第3トレンチ(18T-3)【第48図、圖版12】

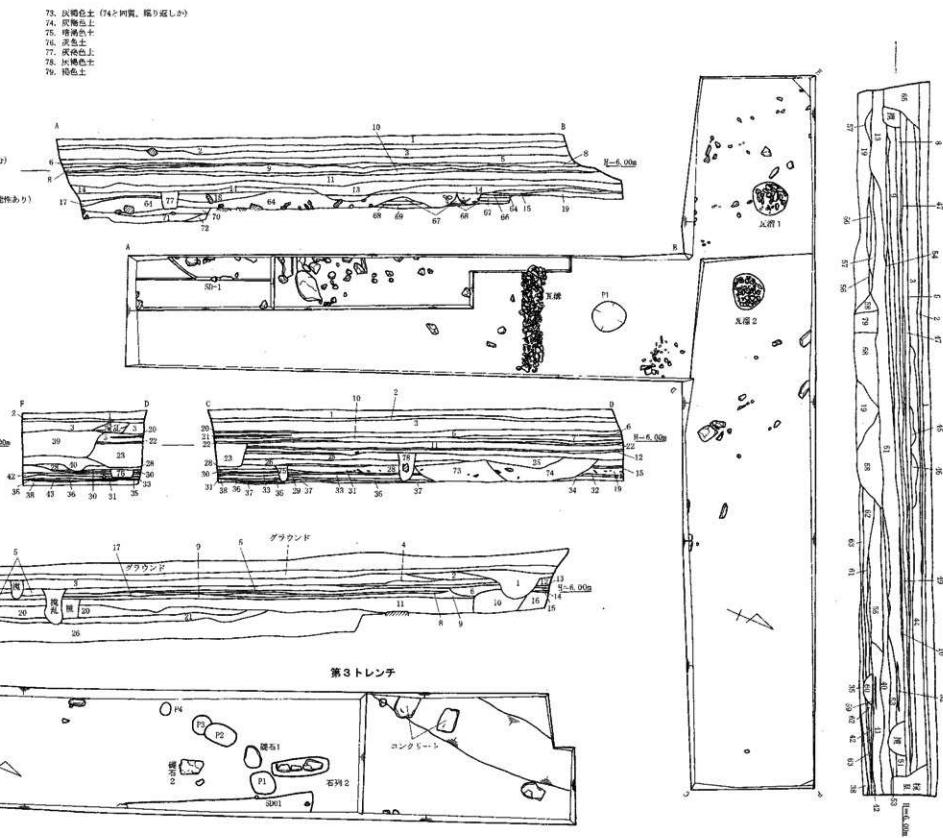
推定御番人小屋と水溜部分に設定した 2×18m の直線状トレンチである。調査区間に照明塔が建っている関係上、トレンチ西側は一段高い位置で止め、東側にはサブトレンチを設定した。表土面は標高 6.5m 前後的位置する。1~9・12~15 層まではほぼ水平に薄く層が堆積しているが、ナイロン製品等を含むためグラウンドの整地土であろう。また、対面断面上の標高 5.8m の地点よりナイロン紐が見つかっており、トレンチ西側の段上部分にはコンクリートブロックが見られることからも戰後にかなりの造成が行われたことがわかる。20~25 層を挟み標高 5.7m 以下には厚さ 30cm ほどの黒褐色土（26 層）がトレンチ全体に堆積する。瓦片や炭灰を含むもの明確な遺構は確認できなかった。しかし、その下層には炭片を多く含む 27 層があり、さらに 28・29 層などの炭片とともに焼土と考えられる橙色土ブロックを多く含む層が広がる。同層からは被熱により赤変した石列（石列 2）を検出した。31~33 層は焼土を掘り

第2トレーナー

1. 鹿児島砂岩（グラウンド）
2. 砂岩火成岩（グラウンド）
3. 亜飛威砂岩（グラウンド）
4. 岩谷砂岩土（グラウンド）
5. 沖縄砂岩土（グラウンド）
6. 舟井砂岩土（グラウンド）
7. 沖縄砂岩（グラウンド）
8. 沖縄火成岩（グラウンド）
9. 沖縄火成岩（グラウンド）
10. 沖縄火成岩（グラウンド）
11. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
12. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
13. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
14. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
15. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
16. 沖縄火成岩
17. 沖縄火成岩
18. 沖縄火成岩
19. 沖縄火成岩
20. 沖縄火成岩
21. 沖縄火成岩
22. 沖縄火成岩
23. 沖縄火成岩
24. 沖縄火成岩
25. 沖縄火成岩
26. 沖縄火成岩
27. 沖縄火成岩
28. 沖縄火成岩
29. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
30. 沖縄火成岩（着色が多め、2面端と一端が）
31. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
32. 沖縄火成岩（国産による、無地質）
33. 沖縄火成岩
34. 沖縄火成岩
35. 沖縄火成岩
36. 沖縄火成岩
37. 沖縄火成岩
38. 沖縄火成岩
39. 沖縄火成岩
40. 沖縄火成岩
41. 沖縄火成岩
42. 沖縄火成岩
43. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
44. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
45. 沖縄火成岩（3面端が）
46. 沖縄火成岩（3面端が）
47. 沖縄火成岩（3面端が）
48. 沖縄火成岩（3面端が）
49. 沖縄火成岩
50. 沖縄火成岩
51. 沖縄火成岩（11層と同質）
52. 沖縄火成岩
53. 沖縄火成岩
54. 沖縄火成岩
55. 沖縄火成岩
56. 沖縄火成岩
57. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
58. 沖縄火成岩
59. 沖縄火成岩
60. 沖縄火成岩
61. 黄褐色火成岩（着色端、3層と同質）
62. 沖縄火成岩（3層と同質）
63. 沖縄火成岩
64. 沖縄火成岩
65. 沖縄火成岩
66. 沖縄火成岩
67. 沖縄火成岩（3面端が）
68. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
69. 沖縄火成岩（着色瓦片を含む）
70. 沖縄火成岩
71. 沖縄火成岩
72. 沖縄火成岩
73. 沖縄火成岩

第3トレーニング

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. 深灰色砂土 | 23. 暗褐色砂土 |
| 2. 地面腐葉土 (グラウンド) | 24. 褐紅色砂土 (グラウンド砂に似る) |
| 3. 褐色砂土 (グラウンド) | 25. 黄褐色土 |
| 4. 褐色粘土 | 26. 黄褐色土 (草木を含む) |
| 5. 灰色砂土 (灰白色地盤がブロック状に混ざる) | 27. 黄褐色土 (灰土、長さ多く青苔) |
| 6. 灰色腐葉土 (灰土) | 28. 黄褐色土 (草木、木の葉、落葉等を含む) |
| 7. 灰色腐葉土 (灰土) | 29. 黄褐色土 (灰土、木の葉、落葉等を含む) |
| 8. 灰色腐葉土 (灰土) | 30. 雜褐色土 (泥炭土) |
| 9. 黑褐色土 (7層と同上) | 31. 黑褐色土 (泥炭土を含む) |
| 10. 黑褐色土 (7層と同上) | 32. 黑褐色土 (泥炭土を含む) |
| 11. 黑褐色土 (4~5cm厚の内層を多く含む) | 33. 黑褐色土 (泥炭土を含む) |
| 12. 地面腐葉土 | 34. 雜褐色土 |
| 13. 地面腐葉土 | 35. 黑褐色土 (泥炭土を含む) |
| 14. 地面腐葉土 | 36. 黑褐色土 (草木と腐葉と腐泥と黒褐色土の層) |
| 15. 地面腐葉土 | 37. 黑褐色土 (草木と腐葉と腐泥と黒褐色土の層) |
| 16. 黑褐色土 (草木と腐葉と黒褐色土の層) | 38. 黑褐色土 (草木と腐葉と腐泥と黒褐色土の層) |
| 17. 黑褐色土 (草木と腐葉と黒褐色土の層) | 39. 黑褐色土 (草木と腐葉と腐泥と黒褐色土の層) |
| 18. 淡灰色砂土 (5葉と同調) | 40. 黑褐色土 (草木と腐葉と腐泥と黒褐色土の層) |
| 19. 淡灰色砂土 | 41. 雜褐色土 (下層に草木多く含む、蘭類層付) |
| 20. 淡灰色砂土 | 42. 雜褐色土 (泥炭土) |
| 21. 淡灰色砂土 | 43. 黑褐色土 (泥炭土) |
| 22. 黑褐色土 | 44. 黑褐色土 (泥炭土) |



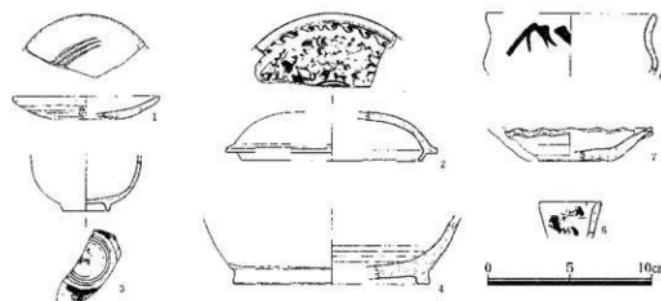
第48図 18年度鳥取城跡第2・3トレンチ実測図 (S=1/60)

込みもしくは落ち込んだものと考えられ、32層ではスサのような纖維質を含む焼土を確認した。これら焼上の下には37~38層のような整地面と考えられる固く締まった砂層が見られる。また、東端付近にみられる41層は5.6m付近より掘り込まれたもので内部には瓦片や拳大~人頭大の石を多量に含む。

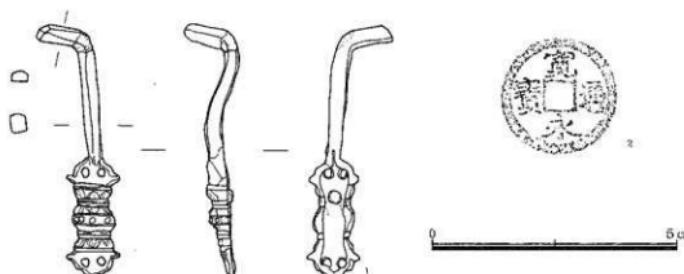
5.3~5.4m付近に広がる焼上面からは石列、礎石、ピット状遺構、溝状遺構、集石が確認された。石列1はトレントに直行する形に北西方向に向かい並び、石の表面は被熱、亦変色している。石列1を境に東側は焼土が10~20cm程度高い位置に見られることから從来は段差があった可能性が考えられる。石列2は北東側を向いて並んでおり絵図では御番人小屋のあった位置に比定されるが、焼土面を切り込んで据えられているため石列1とは時期差が考えられる。礎石1・2については他に連続する石がないため礎石となり得るかはわからないがここでは礎石として扱った。両石とも被熱こそ見られないが焼土面に伴うものである。ピット状遺構の性格はわからないが焼土面形成以前のものである。SD01は石列2同様焼土面を切り込んで掘られているが調査区間での検出であるため性格は不明である。

トレント東隅では集石が見られる。これらは41に伴うもので多量の石とともに瓦や焼土塊を含み、一括で廃棄されたような様相を呈す。

サブトレントで確認した37~39層は固く締まった砂層であり、焼土面以前の生活面と考えられる。



第49図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（1）（S=1/3）



第50図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（2）（S=1/1）

3. 出土遺物〔第49～52図、図版16〕

國化し得た遺物はわずかであり、特に平瓦を中心とした瓦片はコンテナケース5～6箱程度出土した。陶器〔第49図〕

1は第1トレンチ、2～5は第2トレンチ64層、6・7は第3トレンチ27層出土である。1は陶器小皿で、復元径9cm、器高1.4cmを測る。灰色系の施釉がなされ、内面には三条の横目が施されている。2は肥前系磁器の染付碗で底部には「太明年製」銘の一部と思われる太、明、製の文字が残る。3は64層の最下部から出土した肥前系磁器の蓋で、復元受部系は13cmを測る。磯文と唐草文の染付けが施され、本来は中央部につまみが着くと想定される。4は陶器の底部で復元底部系10.2cmを測る。5は磁器。瓶等の口縁部片である。6は陶器碗で復元口径10.4cmを測る。7は青磁の小皿である。内面見込部分は露胎し、疊付は釉剥がされる。

その他〔第50図〕

1は第3トレンチから出土した剣状銅製品で、形態から山鉗剣のミニチュアと考えられる。先端は折損しているが本来は全長5.5cm、最大幅1.1cmを測る。表面には直径1.5mm程の孔が4ヶ所と裏側には直径2.5mmほどの突起が見られ、本来は何かと組み合わせて使われていたと想定される。2は第2トレンチから出土した寛永通宝である。

瓦〔第51図〕

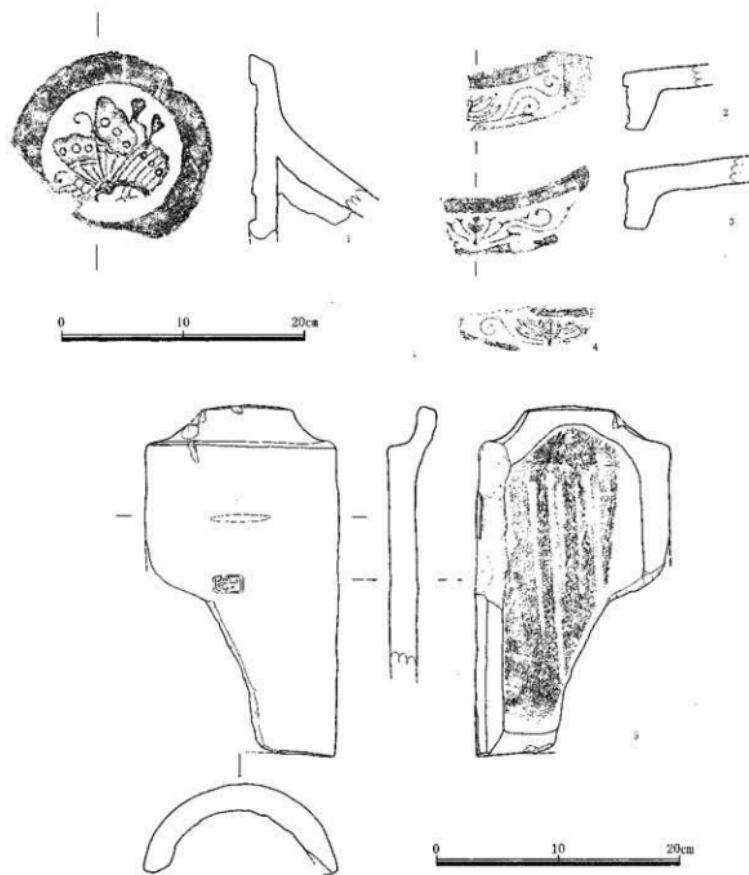
1は第3トレンチ26層出土の軒丸瓦で瓦当面の一部を欠くが外径16cm、内径11.4cmを測る。左側を向く揚羽蝶文が施されている。2・3は第3トレンチ掘り下げ時、4は第1トレンチ出土の軒平瓦で2・4は中央に花文を持つ。5は第3トレンチ集石部分出土の丸瓦で全長28.8cmを測り、凸面中央付近には「作」の字の刻印がみられる。

刻印瓦〔第52図〕

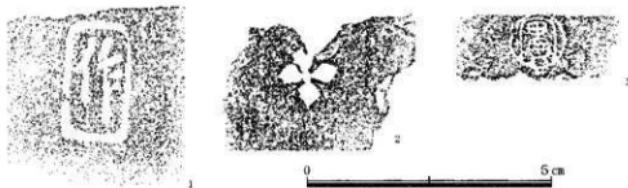
1は第51図5の刻印で、2.5×1.4cmの枠内に「作」の字が入る。2・3は第2トレンチ64層出土の平瓦で確認されたもので、それぞれ凸面、小口面に刻印されていた。2は菱形を連結させた形で、3は1.2cmの円内に「實」の字がみられる。

4. 小 結

平成10年度の調査では中ノ御門の門礎石が台石に乗った状態で確認されており、上面の高さは礎石が標高5.6m、台石が5.4mである。大正期の占写真では標高5.6m付近の石垣が露出していることが確認できており、幕末期の面これより下層にあることが想定できる。また、台石の高さで比較すると、第2トレンチでは32層など登城路と考えられる整地層に、第3トレンチではおおよそ焼土層に相当するため、この高さを幕末期頃と捉えたいが問題も残る。しかし、第60図の旧絵図には第3トレンチの被熱した石列1付近に建物は描かれておらず、火災の記録も享保5（1720）年の石黒大火以降はみられないため、現時点での明確な時期決定は困難である。一方、第2トレンチで登城路と考えられる整地層を確認したことや、第1トレンチで石垣解体レベルを確認したことは成果といえよう。



第51図 18年度鳥取城跡出土遺物実測図（3）（S=1/4）



第52図 18年度鳥取城跡出土刻印瓦拓影（S=1/1）

1. 平成19年度調査の概要〔第46図〕

今回報告する平成19年度の試掘調査は県立鳥取西高等学校改築に伴う事前調査として実施したものである。旧太鼓御門周辺（現在の高校入口部分）で行ったもので、旧地盤面の確認を目的として、石垣裾部に3ヶ所と山側の1ヶ所の計4ヶ所にトレーンチを設定した。地表部分のアスファルトおよび直下にあるコンクリートについては重機を用いて除去した。

①平成19年度第1トレーンチ (19Tr-1) (第53・56図、図版13)

現自転車駐輪場脇の石垣（山高石垣）の先端部分を取り囲むかたちで設定したトレーンチである。また、石垣東面では平成10年度の試掘調査の際のトレーンチを再掘削し比較検討を行った。

第59図のとおり第1トレーンチ部分は登城路であり、路に沿って石垣も山側へ続いている。万延元（1860）年の改修による登城路の変更後も十数メートルは残存していたとされる。

13.4mの道路面から30cm程度アスファルトおよびコンクリート層がありこれらを除去すると瓦片が混ざる21層などがみられ直下には石列が検出された。トレーンチ南隅ではこれら石列と同じレベル（標高13m）コンクリートが広く敷かれている。搅乱を利用し掘り下げた層部分では、標高12.8m付近に整地面と考えられる細砂を用いた薄い層（14～16層）と、下部には埋め土と思われるブロック混じりの17～18層があり、7・12層がこれらを切り込んでいる。また、14～16層と近い標高からは24～27・32～34層のような黄褐色系砂礫主体の整地面と考えられる層が互層状にみられる。これらの層は東側（山側）に向かって緩やかに勾配がついていることからも江戸時代当時の生活面と考えられる。7・22・60層以下は江戸期にさかのばる可能性がある。

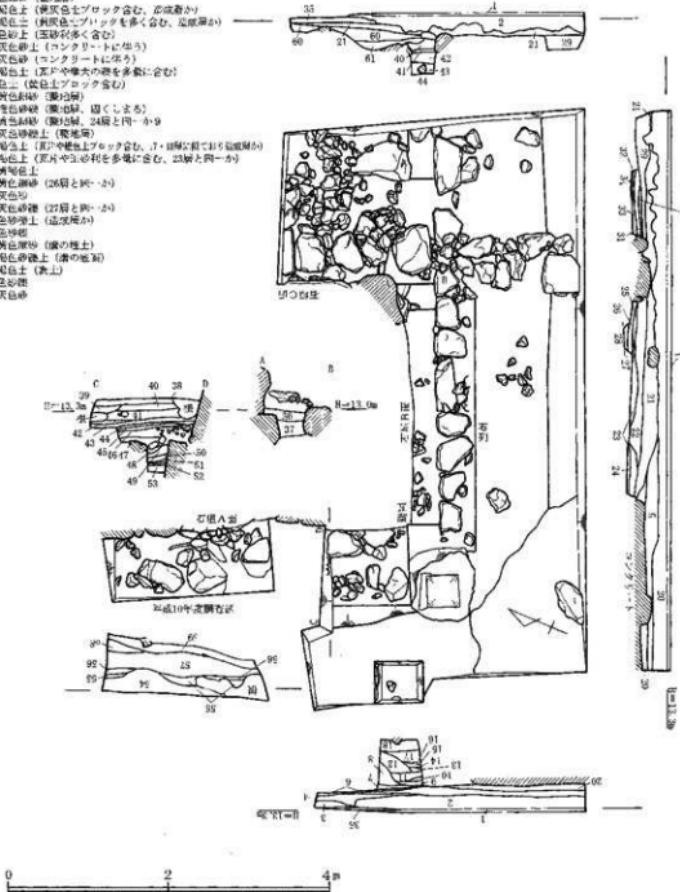
遺構は石列や溝側壁、瓦溜などがある。アスファルトおよびコンクリートの直下には石列2が石列1を覆うように並んでいる。石列1は石垣側に面を持っており、山側に向かって直線状に伸びていく。現在の石垣は直線的に伸びているが、前述のとおり從来は山側へ続いているため、これら石垣1は本来石垣に並行して作られた側溝の一部であったと考えられる。前回の石垣西面での調査でも同様のものが確認されており、図中の溝側壁と書いたのがそれであるが、西面では石垣裾に向かい合わせで石を配して側溝を形成している点で南面とは異なる。また、再掘トレーンチを含め東面は樹根による搅乱が著しく、側溝の対面を検出することはできなかった。学校資料をみると明治30～40年代にかけて石垣を現在の形に積み直しているようで、その際に現東面（第56図石垣C面）を作りつけたと考えられる。すなわち現西面に並行する石列2は明治期以降の所産であり、この場所にあったとされる鳥取第一中学校寄宿舎との関連性が考えられる。

ここで問題となってくるのが石列1と石垣南面との関係である。石列の上面レベルが標高12.9～13mであるのに対し南面の石垣は山側の一石を除きいずれも10cm以上高い位置にあるということである。対面に石がなければ溝として機能することはできず、溝内の層位がそのまま石垣下部へと続く点から、溝が使用されなくなった後にはほぼ近い位置に積みなおされたと考えられる。また、東面（A面）の再掘トレーンチと比べても南面（B面）下端は高い位置にあり、図中矢印部分を境に角までの敷石はやや積み方が異なるためやはり積み替えが伺える。しかし、南面の西端の一石については下部に石を持つことからも從来からの石垣の一部である可能性が高い。積み替えの時期については万延元（1860）年の御宝蔵解体時、明治期の寄宿舎建築の際が考えられる。

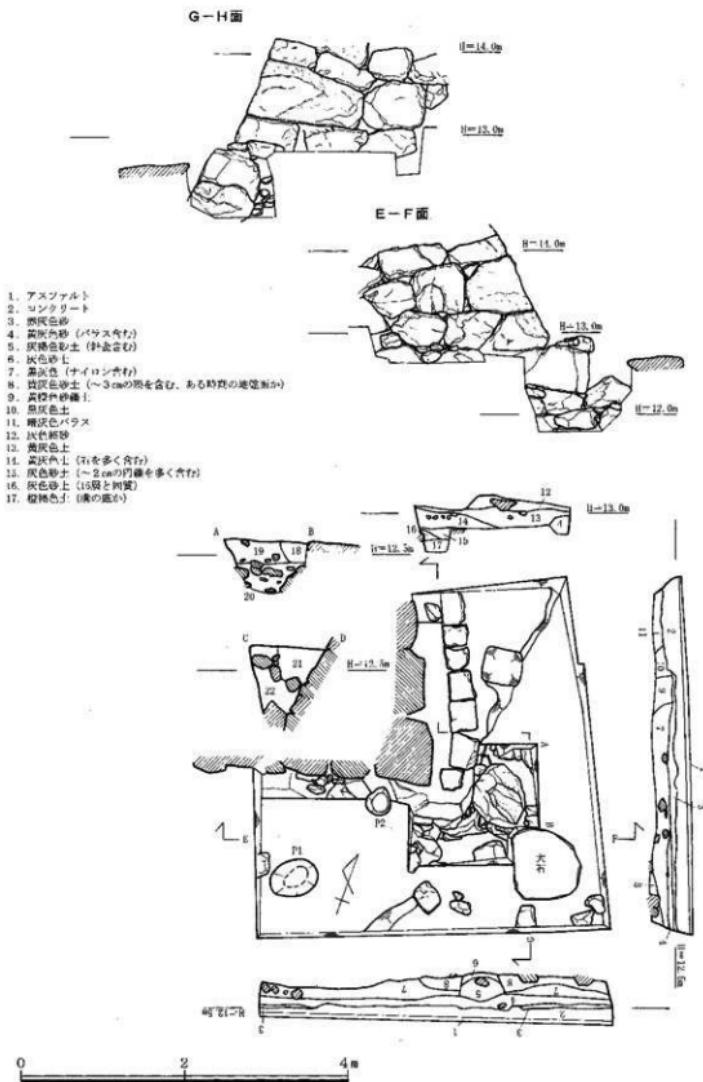
瓦溜は石列内側にあり30cm程のピット内に平瓦片が入っており、一部は石垣下部の隙間に縫合されているため、積み替え以前のものである。

②平成19年度第2トレーンチ (19Tr-2) (第51図、図版13)

旧太鼓御門石垣西角部分に設定したトレーンチで、中央部分は1.5m四方のサブトレーンチを設けた。標高13.2mの道路面下3～13層まではナイロン等大量に含む近代の搅乱層であり、これら搅乱直下で大石や石列を検出した。15～17層は溝の埋土と考えられるA-B面では拳大の角礫を多量に含む黄褐色系の

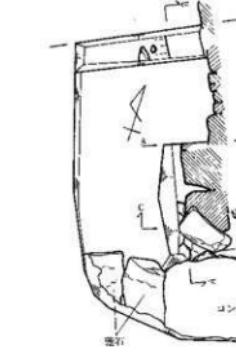
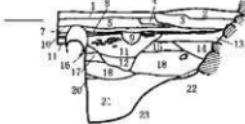
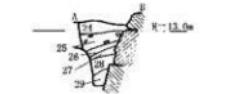
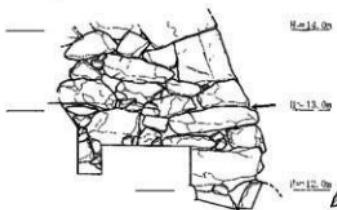


第53図 19年度鳥取城跡第1トレンチ塞測図 ($S=1/60$)

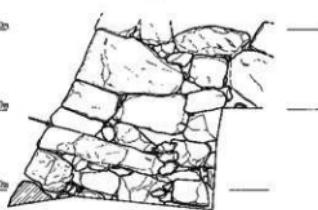


第54図 19年度鳥取城跡第2トレンチ・石垣実測図 ($S=1/60$)

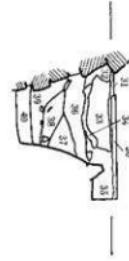
E-F面



C-D面

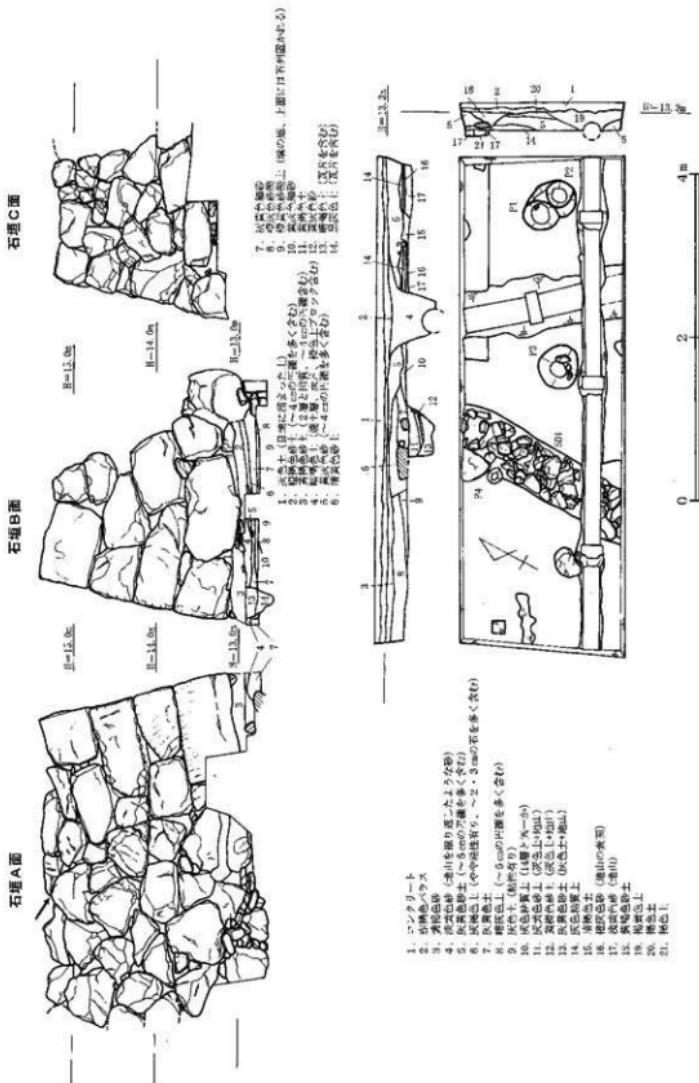


1. コンクリート
2. 黒褐色土 (表上)
3. 黒褐色土 (コンクリート含む)
4. 黑褐色土
5. 黑褐色土
6. 黑褐色土
7. 黑褐色土
8. 黑褐色土
9. 黑褐色砂礫土
10. 黑褐色土 (塊土)
11. 黑褐色土 (瓦礫夾雜)
12. 「灰褐色土」(10~12cm)一層のものと考えられる
13. 黑褐色土 (灰・鐵色斑)
14. 黑褐色土
15. 黑褐色砂礫土
16. 黑褐色砂礫土
17. 黑色細砂
18. 黑褐色砂礫土
19. 黑褐色砂礫土 (～3cmの4段を多く含む)
20. 黑褐色砂
21. 黑褐色砂土 (しまりなし。黄褐色サンドイック、砂礫を多く含む、透視七か)
22. 黑褐色砂質土 (少し砂質の砂質土)
23. 黑褐色砂質土 (砂質の砂質土)
24. 黑褐色土 (～3cm)層、黒褐色土サンドイック含む、10mmに似る)
25. 黑褐色土 (～10cm)層を多く含む、21層に似る)
26. 黑褐色砂礫土 (22層に似る。ある材料の生産面か)
27. 黑褐色土 (角柱あり)
28. 黑褐色砂質土 (アロカク板に添ざり合う)
29. 黑褐色土 (赤褐色)
30. アスファルト



0 2 4 m

第55図 19年度鳥取城跡第3トレーニング・石垣実測図 (S=1/60)



第56図 19年度鳥取城跡第1トレント・第4トレント実測図 (S=1/60)

十（19・20層）がみられ大石を据えるための掘り方と考えられる18層がある。一方大石を境にC-D方向には～40cmの大型の石を多量に含む砂層（22層）がある。この層は厚さが1m程度もあり、整地作業などに伴って一度に敷かれた層である可能性が想定される。

調査では石列やピット状造構、大石、石垣の積み替えを確認した。石列は長辺が3～40cm程度の長方形の南田（円護寺）石の切石を直線状に配しており、明治期以降の所産であろう。P1には平瓦片が多く入っており、瓦窓棊穴のような状況を呈していたが、内部が陥没したため同化し得なかった。大石は搅乱層直下の標高12.6m付近にあり直径80cm、表面は平らに加工されている。性格は不明であるが、絵図では石垣角から西側へ向かっての壠および門が描かれているためそれらに関連するものであろうか。

現地表面から30cmほど下には現石垣標から3～40cm程外側にはみ出る形で別の石垣（以下下部石垣と呼ぶ）が存在する。後述するがこれはみ出しあり3トレンチまでは続かないため、石積み工法による段差ではなく上部の積み替えによるものと考えられる。下部石垣は4段まで確認したが、湧水と調査面積の制約上11.8mまでしか掘り下げていない。

また、大石と下部石垣との間にある大型石材の性格については、下部石垣の一部、石垣積み上げの際の捨石、門関係の基礎部分、別の石垣等が考えられるがいずれも決め手を欠く。

③ 平成19年度第3トレンチ〔19Tr-3〕〔第55図、図版13〕

太鼓御門右垣南角に設定したトレンチで、石垣角部と北端にサブトレンチを設けた。6層に塗ビ皆があることから1～5層はきわめて最近の層である。11層には炭片とともに多量の近代瓦が混ざっており、直上の10層は焼土層であることから10～12層は、明治33年の火災の後片付けの層であろうか。以下比較的厚めの単位での堆積がみられる。標高12.4m付近まで見られた石垣の下部には黄橙色粘土土（22層）、さらに同じ傾斜で黄褐色砂礫土（23層）が続き、その前面には灰褐色砂土（21層）が厚く堆積する。22・23層は三ノ丸拡張以前の面である可能性が考えられる。A-B面でも23層に近い26層がみられ、同じく傾斜を持つ27・28層が続いている。石垣の角石付近を境に南側は搅乱が著しく今回掘り下げた標高11.8m付近までは遺構面は存在しない。

掘り下げは標高11.8mまで行く石垣が下へ続くことは確認したが、水路から流れ出る流水のため調査を止めざるを得なかった。標高12mの現地表面付近（図上矢印部分）では積み替えの跡があり、第2トレンチとは逆に上部の石垣が若干はみだした部分もみられる（十層図31層左）。上部と下部の石積み技法は全く異なり、下部は長大な石を用いた算木積みを呈する。享保5（1720）年の右黒大火後に太鼓御門の修復時の記録は残るもの、石垣の状況まではわからず、いつ頃の積み替えなのかは特定できない。調査区南側には水路の蓋石が二石みられる。

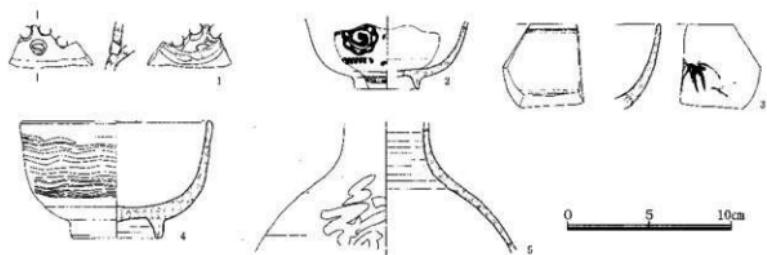
④ 平成19年度第4トレンチ〔19Tr-4〕〔第56図、図版18〕

体育館南側に設定した2×6mのトレンチである。標高13.4mから現代の層を除去しながら掘り下げていくと地表下30cmで地山に達した。地山面はかなり削平を受けていると考えられ、上層に遺構面は残っておらず、地山上にピット状造構4基、溝状遺構1条を確認できたに過ぎない。P1からは鉄片、P2からは平瓦片が出た。SD1は幅50cmでトレンチを横断するかたちで検出した。内部には石や平瓦片が詰められており、試験管のようなガラス片や紫英と思われる破片等が含まれていた。暗渠状の溝であろうか。

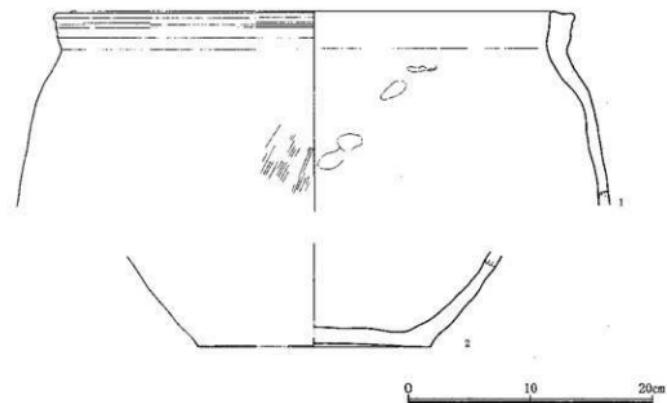
2. 出土遺物〔第57～59図、図版16〕

陶磁器〔第57図〕

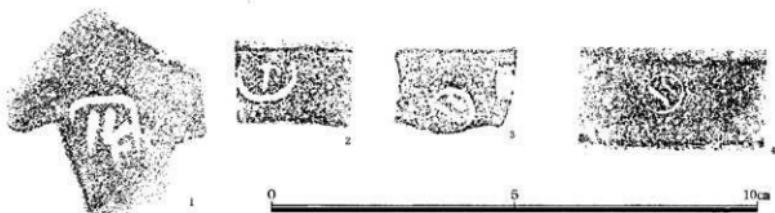
1は第1トレンチ出土の陶器で土瓶の注口部分と考えられる。直径8mm程度の孔が4孔穿かれ、外側には濃緑色の釉がかかる。2は第2トレンチP1出土の磁器碗。3～5は第3トレンチ出土。3は10層出土磁器碗で内面は上下に二条ずつの圓線、外側には筆が描かれている。4は肥前系の陶器碗で復元口径11.8cmを測る。5は陶器器利で外側には「智」とみられる文字が描かれる。



第57図 19年度鳥取城跡出土遺物実測図（1）（S=1/3）



第58図 19年度鳥取城跡出土遺物実測図（2）（S=1/4）



第59図 19年度鳥取城跡出土刻印瓦拓影（S=1/1）

その他〔第58図〕

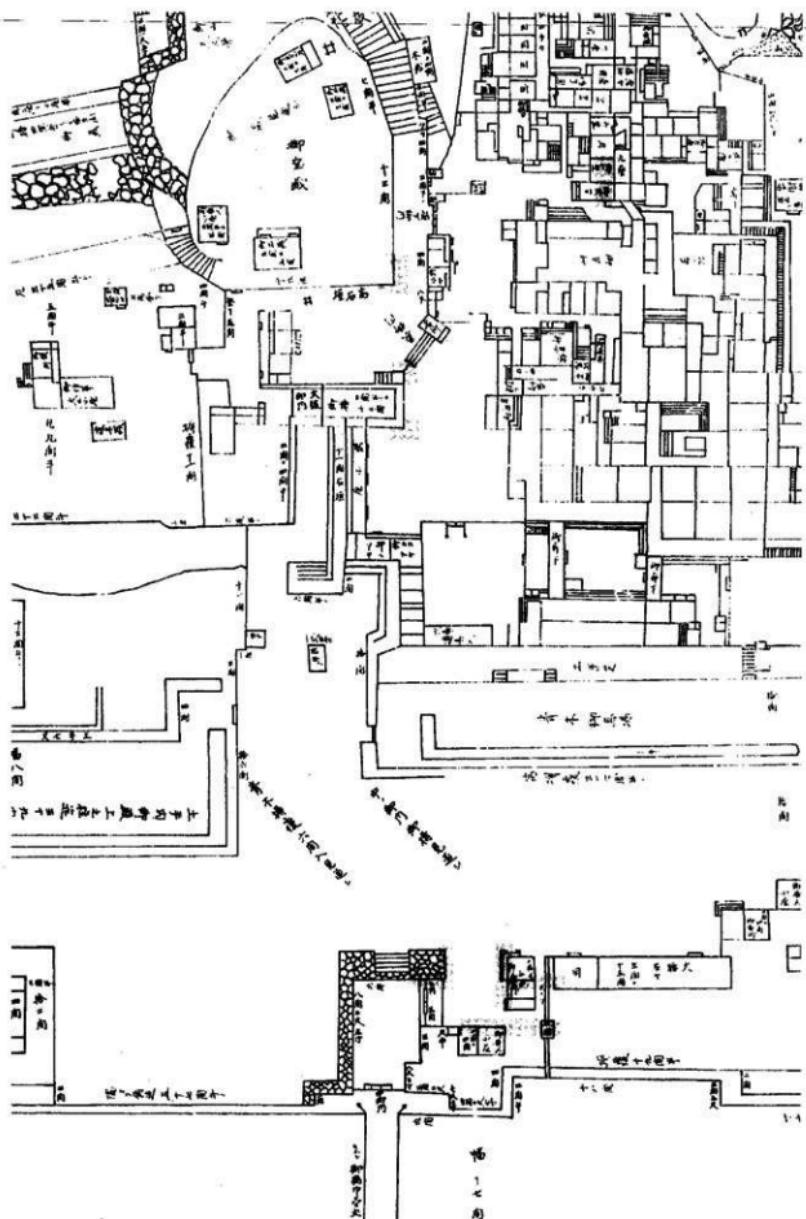
第3トレンチで出土した同一固体と考えられる瓦片であり、1は復元口徑42.4cm、2は復元底部
径19cmを測る。

刻印瓦〔第59図〕

1は第2トレンチP1出土軒平瓦の瓦当面脇に刻印されたもので、下半を欠くが「作」の字である。
2～4は平瓦の小口部分に刻印されたものである。2は第1トレンチ出土で直徑1.2cmの円内に「十」
の字が入る。3・4は第3トレンチ10層付近出土で3は直徑9mm、4は直徑8mmの円内に「ニ」の字が
入る。字は同じであるが形態がやや異なる。

3. 小 結

各トレンチとともに後世の搅乱が激しくまた、予想以上に遺構面が地表から浅い位置にあるため、明確
な幕末期の面を捉えることは困難であった。第1トレンチで確認した旧地盤面は18年度調査時に確認し
た登城路面と質的に似ており砂礫を主体とした薄い層が何層も重なっている。第2トレンチ22層や第3
トレンチ21層は一度に埋め立てられたような層であり、三ノ丸が順次西側に拡張されて行く際の造成層
と考えられる。造成層の上に位置する遺構面は数層あったと考えられるが全体としては薄く、地表面か
ら浅い位置にあるため遺存状態は非常に悪いことが予想される。



第60図 島府久松山御城積間図（天保15年）

*島取県立博物館所蔵原図を島取市教育委員会にて再トレスおよび加筆

写 真 図 版



図版 1



大坪大縄手遺跡調査地遠景（北東から）



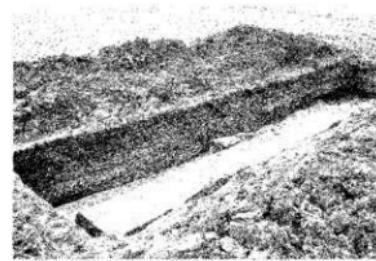
大坪大縄手遺跡第23トレンチ掘下げ状況（南から）



大坪大縄手遺跡第23トレンチ北壁断面（南から）



大坪大縄手遺跡第24トレンチ掘下げ状況（東から）



大坪大縄手遺跡第24トレンチ北壁断面（北東から）



大坪大縄手遺跡第25トレンチ掘下げ状況（北から）



大坪大縄手遺跡第26トレンチ掘下げ状況（西から）



大坪大縄手遺跡第26トレンチ南壁断面（北西から）

図版2



大坪大縄手遺跡第27トレンチ掘下げ状況（南から）



大坪大縄手遺跡第28トレンチ掘下げ状況（北から）



大坪大縄手遺跡第29トレンチ掘下げ状況（南から）



大坪大縄手遺跡第29トレンチ東壁断面（北西から）



大坪大縄手遺跡第30トレンチ掘下げ状況（東から）



大坪大縄手遺跡第30トレンチ西壁断面（東から）



大坪大縄手遺跡第30トレンチ遺物出土状況（西から）



大坪大縄手遺跡第31トレンチ掘下げ状況（東から）

図版 3



大坪大綱手遺跡第32トレンチ掘下げ状況（東から）



大坪大綱手遺跡第32トレンチ南壁断面（北東から）



大坪大綱手遺跡第33トレンチ掘下げ状況（東から）



大坪大綱手遺跡第33トレンチ西壁断面（東から）



大坪大綱手遺跡第34トレンチ掘下げ状況（北から）



大坪大綱手遺跡第34トレンチ東壁断面（西から）



大坪大綱手遺跡第35トレンチ掘下げ状況（東から）



大坪大綱手遺跡第36トレンチ掘下げ状況（東から）

図版4



大坪大縄手遺跡第37トレンチ掘下げ状況（北から）



大坪大縄手遺跡第37トレンチ北壁断面（南から）



大坪大縄手遺跡第38トレンチ掘下げ状況（北から）



大坪大縄手遺跡第38トレンチ南壁断面（東から）



善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ掘下げ状況(南西から)



善田傍示ヶ崎遺跡第1トレンチ西壁断面（北西から）



善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ掘下げ状況（南東から）



善田傍示ヶ崎遺跡第2トレンチ西壁断面（北西から）

図版 5



青谷上寺地遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南西から）



青谷上寺地遺跡第1トレンチ北東壁断面（南西から）



短尾遺跡第1トレンチ掘下げ状況（東から）



短尾遺跡第2トレンチ掘下げ状況（東から）



短尾遺跡第3トレンチ掘下げ状況（南東から）



高江所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南から）



高江所在遺跡第1トレンチ北壁断面（南から）



清水所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北東から）

図版6



清水所在遺跡第2トレンチ掘下げ状況（西から）



最勝寺山城跡第1トレンチ掘下げ状況（北から）



上土居遺跡第1トレンチ掘下げ状況（東から）



東今在家所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北から）



東今在家所在遺跡第1トレンチ南壁断面（北から）



横枕前田遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北西から）



松原所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（北西から）



松原所在遺跡第1トレンチ南壁断面（北西から）



妙徳寺所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南から）



妙徳寺所在遺跡第1トレンチ東壁断面（西から）



布勢所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況（南東から）



布勢所在遺跡第1トレンチ南壁断面（北東から）



天神山遺跡調査地遠景（南西から）



天神山遺跡調査地全景（東から）



天神山遺跡第1トレンチ第1面検出状況（西から）



天神山遺跡第1トレンチ北壁断面（南西から）

図版 8



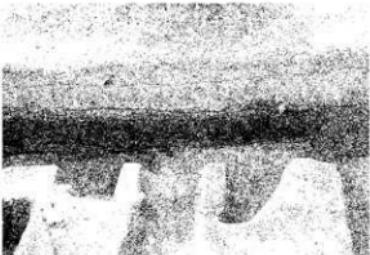
天神山遺跡第1トレンチSE-01断面（南から）



天神山遺跡第1トレンチSE-01完掘状況（南から）



天神山遺跡第1トレンチSK-02完掘状況（北から）



天神山遺跡第1トレンチSK-04断面（東から）



天神山遺跡第2トレンチ第1面検出状況（東から）



天神山遺跡第2トレンチ炭集中部1検出状況（北から）



天神山遺跡第2トレンチ第2面検出状況（東から）



天神山遺跡第2トレンチ北壁断面（南西から）

図版 9



天神山遺跡第2トレンチ中央東西ベルト断面（北から）



天神山遺跡第2トレンチ北西隅断面（南から）



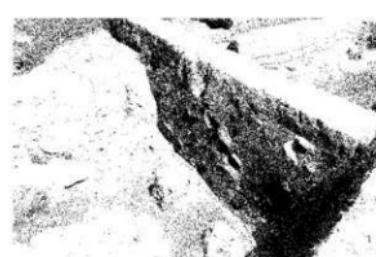
天神山遺跡第2トレンチP-05断面（南から）



天神山遺跡第2トレンチP-06断面（南から）



天神山遺跡第2トレンチ集石検出状況（東から）



天神山遺跡第2トレンチ中央南北ベルト集石部断面（東から）

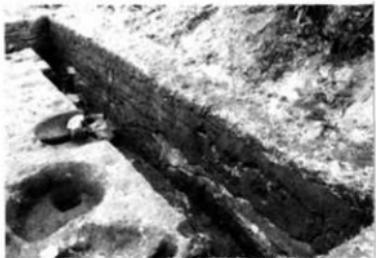


天神山遺跡第3トレンチ第1面検出状況（西から）



天神山遺跡第3トレンチ内サブトレンチ掘下げ状況（南から）

図版10



天神山遺跡第3トレンチ北壁断面（南東から）



天神山遺跡第3トレンチ東壁断面（南から）



天神山遺跡第3トレンチ西壁断面（北東から）



天神山遺跡第3トレンチ第1面焼土検出状況（西から）



天神山遺跡第4トレンチ掘下げ状況（南から）



天神山遺跡第4トレンチ北壁・西壁断面（南東から）



天神山遺跡第5トレンチ掘下げ状況（南から）



天神山遺跡第5トレンチ北壁・東壁断面（南西から）

図版11



18年度鳥取城跡第1トレンチ（北東から）



18年度鳥取城跡第1トレンチ石垣1・2（南東から）



18年度鳥取城跡第1トレンチ石垣3（南西から）



18年度鳥取城跡第2トレンチ（南西から）

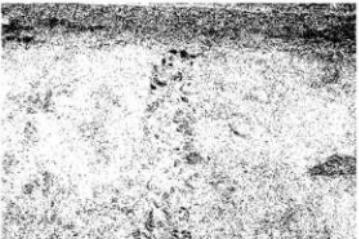


18年度鳥取城跡第2トレンチ（南東から）

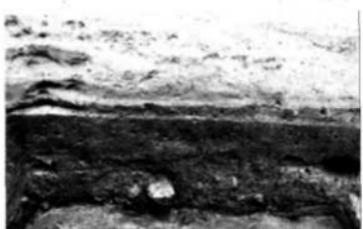
図版12



18年度鳥取城跡第2トレンチC-D断面（北西から）



18年度鳥取城跡第2トレンチ瓦溝（北東から）



18年度鳥取城跡第2トレンチA-B断面（北東から）



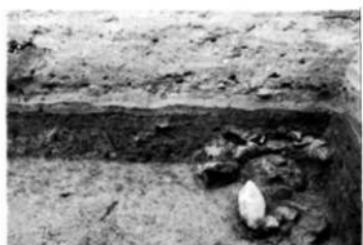
18年度鳥取城跡第3トレンチ全景（北東から）



18年度鳥取城跡第3トレンチ石列1（北東から）



18年度鳥取城跡第3トレンチ集石（南東から）



18年度鳥取城跡第3トレンチ集石（南東から）

図版13



19年度鳥取城跡第1トレンチ全景（南東から）



19年度鳥取城跡第1トレンチ南東断面（北西から）



19年度鳥取城跡平成10年度調査区（南西から）



19年度鳥取城跡第2トレンチ全景（南東から）



19年度鳥取城跡第2トレンチ全景（北東から）



19年度鳥取城跡第4トレンチ全景（南西から）



19年度鳥取城跡第3トレンチ石垣（南から）

図版14



1



2



3



5



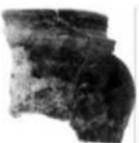
8



1



2



4



5



7



8



2

大坪大綱手遺跡第30トレンチ出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



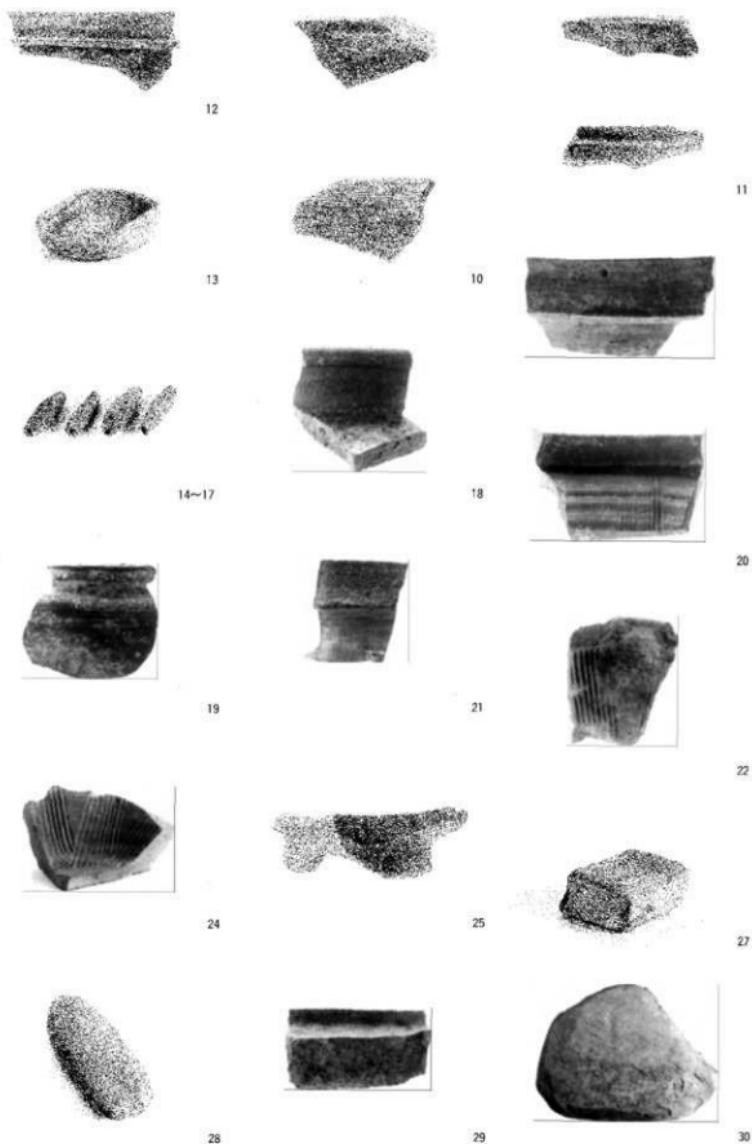
8



9

天神山遺跡出土遺物（1）

図版15



天神山遺跡出土遺物（2）

図版16



49-2

49-3



49-1

49-4

49-5



49-6

49-7

52-2



51-1



51-4

18年度鳥取城跡出土遺物



57-1

57-2

57-3



57-5

59-1

19年度鳥取城跡出土遺物

報告書抄録

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成20(2008)年3月発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 株式会社矢谷印刷所
